和訓栞

志之部

十一

津田文庫
文庫 1
1604
12

倭訓栞前編十一

志の部

洞津　谷川士清　纂

志○為をよむハすと通へり○不をよみてよむハ寸といふ非然の辞之訓に純の東ぶ然て未然といふあり不ハ未也と注せしが如し又自ら豫(カネ)て禁さるをいふ勿ハ禁止の辞と注せしが如しといへり○助語に多くいへるをなを未来現在にいふ獨称なれどもいやしく聞ゆるを獨しぬるを休めてやさしく聞ゆる也たゞちに称呼かへるともいものしも同じさいハ道あるの文舟をしそれより絶てしばらくハ請としきのハの部ハ現在也君ゟ久しかるへきといふハ未来なりし也といへり是皆助け辞也又しをと略しゝなむなし撰集抄しらし於て此部ぞ○日本紀に羊蹄をしとよめり又中蒂姫ひぬ蒂も蹄に同し倭名抄にも羊蹄菜和名しとあり新撰字鏡りハ志れをとみえ今俗ぎしくもまふともいへり南へて大黄に近和母やまし此類しとうる古人ハ皆蹄の類也○土師藥師繪師塗師なと

しハもと為の義作業をいふ師ハ備ふるし○已をしとよめるハ日本紀古事記に見えたり○死をしといふも音にはあらず死ぬの称の、行に用うけるをすぎ又志也○磯をしといひしの略石も同し磯城磯長の類多し

△しはせ　為合せる時運によりて泰否あるをいふ造化を譯せり

△しいす　弑字をかくよみ来れるハ音を引たる也已時のごとし

△しうとく　源氏に見えて宿徳也といへり

△しうと　しうとめ　和名抄に舅姑をよめり傍人傍人女の義なるにやといふ又しうとめ日本紀にハ婚姻をもしひとよめり新撰字鏡に婚をしひとよみ婦人之父を涯ぞり媛嬪嫤をもしひとめとよめり○鈔に外舅和名與婦称夫之父同一云婦翁也外姑和名與婦称夫之母同一云婦母也○婦か姑になるといふハ字彙古詩に人命百年能幾何後来新婦今為婆と見えたり俗に慈姑の芽蕗の薹をしうとめともいふ媳ハ蹈かしといふ俗諺に出たり又しうとめハ芽の義なり

△しをん

△しをり　新撰萬葉集に芝折とかけりしをりハつけ字折りてしるしとなすべし万葉集にも栞に志をもて表したり吹かへすに秋の華の木の志をるもあやしとよめるミにありて志をるとよめるハあらず○伊勢物語に命にかへてしをりたまふ文女をまして志をりたまふといへるしをるハ同義なるべし

しをる　少をるは本の枝を折かけて道のしるしとするをいふ標折の義又栞折の義なるべし日本紀に折取枝葉とみえ栞をいふに利も梨と同し字書に栞槎識也周伯温か説に禹貢随山栞木謂随所行林木斫其枝為道識也と見えたり新古今集に西行法師

よしの山こぞのしをりの道かへてまだみぬ方の花をたづねん

○近世文房の具に志をりと名付し物有り綾綺をもて小幅を造り右の奇をかざり讀かけの書を経る時ハ葉の間に挟て後日の標識とす古今其止所にしをりまた益者の有もかありかへりてハ字なるもの身にはさまるをしをりとやせ群

○魚にいふハ即まんびきをいふ○城廓にもいへり

△しか　鹿をいふ肉香の義にや角乃岐の義によりて説を為ものに
説を退るもの也と山家の説に角に十二の岐あるもの南都正倉院の
寶物にあり文楓の形しるしあり軍用にせし事多く見えたり眼科にも
角を角石といふ甲斐國大升光吉ヵ妹強力ありしヵ鹿の角を膝にあてゝ
折たり○しかしの鹿ハ鹿児にて明ねるの事といへり○草庵集
　吹まよふ小萩しもしき鹿の聲すゝて友をさけふ秋の山もと
事文類聚に野鹿伴茅屋と見えたり○新撰字鏡に跋を鹿のとゞろわが
くとよめり○小野宮右府記に薬大貳所献白鹿云云白鹿ハ景行紀より
見えたり○史に多入鹿為證前言といへるを見て叛をさるゝの首を渡されり
させしの八耳よりいでたるにや○春日に鹿を神使といへるハ第一殿の鹿
島神にて神幸の時鹿に乘玉ふよし古記に見えたりとぞ嘉日粥とも
り鹿は家に多くてむれぬし○しかぞすむしか一日すむと家居といふ辞く
○しかもしくいふ辞ハ然るの家の恐兵の詮と殖子ハ和語の緒の字ゆ万葉集
に詁字をよめるも家あり新勅撰集

　家隆　小倉の山の峯のいほは浮世をはなれし鹿の鳴ね月をあはれ
○しかを追ものハ山を見ず　淮南子に逐獣者目不見太山と見ゆ
しかが
　左傳に不汝疵瑕也と見えたり人の非をいひて疵つくる事を京畿
の詞にしかがといひ近江の志賀辛崎によせて人の志賀からさきと見えて事を云
る是也といへり一説にさがなしと同義也といへり○志賀の都ハ天智天皇の
大津宮をいふ志賀を荒都ともよめるハ万葉集に過近江荒都と見えたり
○志賀寺ハ崇福寺也三井寺の北にありき○志賀の山ごえといふハ北白河の
瀧のうへより登りて如意ヵ嶽ごえに志賀に出る道をいふと云へり○新勅撰集に
　志賀の浦にいつもの浪をそへて天津けしきかへしへ乃ほそ
是を延暦七年傳教大師叡山建立の時三輪明神五色の光の波の上に浮
舟に寄ゝて志賀の浦に漕寄給ひしといふ故事によれり
しかり
　然をよみ神代紀に唯然をよめりしかハ如をしくとよむの轉也とハ
有の義也しく有のくはを反せハか也万葉集に然しもあらんといふを一に如ヵ
是もあらんと見えたり字書に然ハ如是也と見ゆ然をしかくとよむも是く

○しかしもハしかさへといふに同し万葉集古今集なとに三輪山をしかもかく
すらくもあるかなとあり今は俗語にも用ゐたり○しかれども 然
あれどもの略也○爾をよむハ詞之必然也と注せり如是切音爾なれハ音
訓ともに二合の字也俞をしかとよむハ堯典にみゆ古語に然也とあり又句末に
然とあるをしかると焉と同しといへり論語に不得其死然孟子に木若以美然此
類也又晋宋の文に寧馨如馨地爾なといふも然也此義寧一字馨一字ハ
しかりとよむへし

しかず 不如不若不似をよめり二義あり如くならずといふと及ばずといふと
いふとなり

しがふ 顕昭の説にしがふハ茅をかりて束ねて末を結び合するといふものを
もいふつがふをといへり前にしがへて屋がみまくなどいへる文あり世にあるをしび
かけつかねといへり

しかむ 蹙とよめりしかめるをもいふめる皮也神代紀にも出目をしかめと見ゆ
つらをしかむる意し

しがく 源氏にみゆ試樂とかけり音樂をまづならすをいふ也調樂とも書也
笛の音も箏の爪調琵琶撥合なとをいふ石清水臨時祭の試樂ハ祭の
前一兩日にあり江次第同之と雲圖抄にみえたり○俗語しがくのちがひ
をいふも試樂より出たる詞なるへし

しかく 神代紀に云云をよめり然りくのことし文選の注に云云謂辭
多略而不能載也といへり漢書に吾欲云云猶言如此如此也とみえたり
又云爾を神代紀にしかいふとよめるもしかくとよむへきにや俗語の中に
はしかくいふをみえたり云云爾爾の省語也とせり通鑑注に爾爾如此
如此也とみゆ物にしかくれるをいふも是なり○俗にしかくといふ
ハ氏言にいへるをハ御の義なるへし

しかさま 今昔物語にみえたり然様の義なるへし今しかうといふ詞ハ然
うさまの約訛せるにやしか反さしやうハ音なるへし

しがらみ 万葉集にみゆ柵がらみの義なるへし柵をよめり篩も同し
川なとの水を防かんとて杭なとを打つけて横さまに竹木なとから

みつくろと云り　ゑの志がらみ　瀬の志がらみ　升にの志がらみ　打どころあり　袖
の志がらみ　風の志がらみ　苔の志がらみ　涙の志がらみなどと云へり　續て　云る

○古今集に

秋萩をしがらみふせて鳴鹿の目には見えずて音のさやけさ

顕昭の説に鹿の萩が枝を折敷てふしたる也と云り　しがらみかの志がら
みに纏ふといふなりと云り

志かれども　而然字をよめり　志かるハ然有を約めて許に用ひ之然と
此詞ハ今にてハ好まざる詞なりと云り　雖然もよめり　東遷記文に
多く然の假名に爾を用ふ　万葉の歌に凡也

志かうして　而字因辞也因是之謂也と注せり　然字又然而をもよめり　志
かくしてなりといふと同韻也　然を如是若此之辞と注せり　かくハ如是の
意也　然後ハそこでの意也

志かもがな　万葉集に多し　後世さすがにといふに同し　志か又さし　然為鑒
なと思ふからやといへり　○参河の國にしかすがの渡りあり　金

叢集更級日記に見えたり　大門村ハ劔社の辺なり

志かぞまも　然そ行の歌なり　顕昭説なり　志かぞハさぞと云ふ詞にて
何をかくぞといふに通ずと契沖の説也

志かしながら　然思ひながら也　さりながらに同じ　日本紀に一切をよめり　今
俗字をよめる此歌なり　○今俗略して志かしともいふ

志かのみならず　加以或ハ加之　古事紀の序に並加をよめり　非然而
已れ歌に及ぶ事至若をよむも同じ　新撰字鏡に啻をしかのみならずと訓さ
なきハ不啻を志かのみならずとも訓すべし　今ハ何くせしかるとよめり

△志き

日本紀に重字　古事記に繁字をよめり　敷の義なり　○志きしき
絶しき凌ぎ　まずしき　印しきの助辞に　いふハしくしくの約言に似たり　○
城をしきとよめるも日本紀に見えたり　韓語にや　○磯城ハ堅固と稱
せる辞　磯城神籬など見えて百磯城の祝稱も侍り　後にハ大和の城名
ともなれり　○枕草紙に頭弁の志きにまゐりてといふハ職の音を流然
草小路のをさひに世の志き方の志き事と見ゆる式字なるべし

しきり　仍旋頻屢連比荐なとよめり重繁の意也仍ハ頻也と注し旋
ハ旋還也とみゆ屢ハ頻数也と注し連ハ俚語のつゞけて也此も連に
とみゆ切なるをも論切の意にしきつてといふなとミゆ○あれへぶ
ていふハしきるの訛也○全浙兵制に女鞋をしきりともこんごとも訳せり
底用皮包席と云ハ席ござあるをいふ宇治拾遺にしきりと見えて下学集
に尻切と見ゆ今ハせきだといふこんごハ金剛也安然和尚奚かりし附
草履を織て営とする人同へハ金剛の性体を蒙らしむとて振とはす今
伊勢にて藁の草履を呼て金剛と呼なりて金剛坂の坂名もありといへり
男娼の召つかふものを金剛と呼もまたこれなり

しきゐ　日本紀に席をよめり敷居の義也禁中古ハ坂に席をしきて坐
せしといふ是也今のござ也○孝経に曽子辟席曰参とあるハ若の同
ぬるハ席を離れて敬するを相手まて復坐語女なとも見えたり

しきも　万葉集に敷藻相ともあり朝手作をしきて裳なるはしきまでとりなく
いふもしたり敷裳ハ敷居の裳にて手すゆの義なるへし

しきし　色紙と書り源氏にしきしまして文ありと見て枕草紙に
もみちのくの紙しきしなどしとあるをいへり色紙形とて寸法の定
まりハ後世の事なるへし或説に定家卿小倉山荘の色紙をかきしといへり明
月記補に文暦二年嵯峨中院色紙形善恵入道自天智天皇以来及家隆雅
卿とみえたり今いふ百人一首のもとなるへし風雅集にも賀茂重保が堂の障
子に時の哥よみどもの哥を出て名よみたる哥を色紙にかゝせてかへしまうし
とも見ゆ○小倉色紙ハ伊勢の御司所蔵のもの一双に百枚を押せる○縁名
抄に色紙といふハ牘也といへり染紙と哥によめる衣物なへし今いふ紙といへり
色紙染紙の字畫史に見えたり○婦女のもとりたる鏡にうち打せるをいふも
色紙形より出たる詞成るへし○かくきざみの板をもて色紙形といひ
又草子形といひて紐つけたるもあり○古筥に色紙形といへり

しきゐん　公事根源にしきゐんハ敷居にて堂上に敷たる座に居るといふ也さ
なり又江次第抄に諸司昇着堂上所敷座也引聲召之時曰敷尹と見え自負
郎縁式にハ必侍座と記し江次第にハ侍座とも之丈井尓とも敷居などとも

姿尹とも記せられハしきしまと唱ふへしきしまにを音便にてしきしまといふことハ
わし說なれどとなひあやまれるなどといふ説も有るにや紀にしきしまとかへり
はかゝず又侍従とかへるよしハもとハしきしまに侍まで宣ひしを語略して
しきしまとなかりはひしまんゆゑなり庭に侍止宣ふ字後世にかへるといへり

しきなみ

　新撰字鏡に浥潜をしきみ日本紀に重浪万葉集に敷浪腫浪な
と云又跡位浪跡座浪とかきて菅万に頻波とよめりしきなみハ頻の義にて万葉
りしきく浪のしはくとよみ古今にもせにお浪のしはくもとより定数ある
わかつまにおてハかへるしき浪の立ためるもそれもあ人そみえき

しきたへ

　敷栲敷妙敷細布布栲なとも万葉集にかけり或ハ色妙とも書る
とあて古語にいへるなれハ正にすかり又敷白ともかけりしきたへハ絹布の名也
しきたへの衣いふハ衣にいはくそ神にもたはもも宅とも黒髪ともかけて
あり今にいふ姿和衣もこれへし

しきがみ

　前書にみゆしきかみとハ神といふ新猿楽記陰陽師の條に仕式
神と書て式神といふ事もあり実ハ人形の識神にて巫蠱の妖術なりと

いへり撰集抄に地の識にありかりてとんで宇治拾遺に記してうそなるとみて
古記に式に厭着あるといふも此後代の人形なり紀るとふいへり元世祖の阿合
馬を誅して熟人皮を得られも呪詛の邪法なへし○撰集抄に高野の
奥山にて髑髏骸骨を集めて人形を造りしことにかける公卿の君らもなる人ハ
現に朝廷に仕へて官禄を受てありしなといへる事を記し平沢氏の語に
ある山中に山縁に於て其里人多く居られし縁数百仞の巖壁の下
り家造りせし人ありて一日人影の巖に映せしを見たりけり日くにことごとく
なり形容ことごとく具はり口鼻耳目悉く運動の様まで見えしるハ近づき視
るに全く人也かの身合をりつくしまちく陰へるまゝに家郷につれ来て
養ひ立りしが附の年ころ此ものゝみえてし年を歴て妻をもちて一子
出生しぬるが今存生と田中氏何へ此等の事をいひくさにそ

しきしま

　しきしま此乃和名に集るに日本の総名のことくいふも磯
城島乃都ハ欽明天皇の久しく治めたまひし所なれハめでられてや後代に至て
いふなりとそ又神名式に對馬國敷島神社あり式の祝詞に皇神の

敷坐流の八十島也みな萬葉集に日本國者皇祖乃神之御代自敷座流國爾之有者と見え天皇之敷座國なとも見ゆ書に島敷主と見ゆ敷の也一なの名を奉ていふへきにいたれり○前後をうけてしきなみといひかくへ浪も在の祝詞の義に近しやまとうたといふ語を加へし為相似見ゆるそ人のおもりつかうそ神代をうけし出雲國なり

しきしきに　頻に思ふ也といへり萬葉集に布慕なとも見ゆ志きふ字加へし

しぎのはねがき　鷸の己か觜にて羽をしごく音の高くいかにもいやなりそ數も志げくは百羽かきともいへり羽搔ともよみ曉天に必かくなれはいはゆる直に曉の事にもいへるなりといへり○龍鳥ヶ省經といへる俗諺はその田にある居附の閑默なるをもて羽搔のごとし

△しく　多くの辭につけていへり重字の義也○爰なとよめり重仍と通へり流まつ布をよむも同し神代紀に鋪設なとよめり藉とよむに同し○神代紀万葉集に及字をよめり古事記に追志きて後の事にむかへ月並にしくものそなきといふ見ゆおよふといふ語も重ねるによる○書に如

字をよめり及の義也不如は不及の意也○出雲にて紙をまくをしくといへり

しぐれ　天陰りて小雨するをいふ頻昏の義事に志ぐれのあめといふは本義なるへし○新撰字鏡に霂又雹をよみ童蒙頌韻に霡をよみ倭名鈔に小霡雨をよめり萬葉に時雨をよめり霡雨は小雨也といひ時雨は漢晋春秋に喜如時雨とみえて好雨如時節のことなれはいふなるへしといへり或は液雨と訓せり十月雨也と注せり古今集に秋のしくれをよめり万葉集に鐘禮とかけるは鐘をしくといふは黃鐘のよみの如く古音なるへし今も朝鮮音にしくといへりとそ○しぐれのしは水ならん辭也○しぐれ月は十月をいふとそ今も小しぐれといふ實業ての狂哥に
霜月りまれふるはしくれやまと十月に十ハふるねそ通ふへし
十月にしくれはふるねと讀るいふ時雨はしくるとよみたるは
唐詩に風吹山帶遙知雨盧山記に天將雨則有白雲或冠峯岩或亘中領俗謂之山帶不出三日必雨とみゆ○定家の哥にしぐれのわくとみてより

宗祇説にめづらしき事のさしぐれといふ事なりといへり○後撰集の頃着旅の時雨を袋草紙にはさきぐれと訓せり

しぐむ　芽の咋合するがごく萌出る事にいふ万葉集に角のふくらにしぐひあひしんさうとこそ同義なるべし又しぐむ前といふ俗語もひわ及びさびれは同語なりふんかし東國にしぐむ又しぐむ腔をはまるむ又ひぐる皺縮にけすむ意はやはり関西にてこるともいへり

しく　万葉集に屢をよめり又数しくにと見ゆしく〳〵に同し○新古今集に書面のしく〳〵にては〳〵と見えて古京太夫家集にはしく〳〵かなしくてしく〳〵と注せり今の事をなきと見えたりしけるうへかなり今しくかくともいへり

しくめる　古今集に見ゆ風の吹しくにいへりくめ及けるかんはしけるなり志けるかは頻なるを一説に唯しくといふ意也をなされば句調のさめに加へし作者の辞也ともいへり

△しけ　日本紀に一大隆をしけとよめり日のしけり也しぐれと通へく

れ及け也今も東国の俗ハしけといひ西国の俗ハしぐれといふといへり○日本紀の訓にハしけしけくと見えたるハ及の義也

しげる　繁をよめりけり及く茂と義通へり滋字茂字も同し蔥蘢もしげり也青盛貌と注せり○家をしげと有によめるハ山の茂るを一家二家といふよりいへる成へしといへり摘正家なり孫にいふ阿蘇文の神主友成も訓る家にハ是もしげと呼来れり鎮とよめるハ天孫の家成へし大友義統伝り

しげき　繁木の義なり中臣祓に彼方(ヲチ)の繁木かもと見えたり後拾遺集にみかしの野ハ是のしげきかもとも多よめり繁木か下ハ寄なりけり二ハ都より必要なる也万葉集に出るる京都にあたるみ彼方(ヲチ)の前土(ハニ)の小屋とよみしも山里のさまなり

△しこ　神代紀に醜男醜女醜目(シコメ)等と見えたりみなくさきものを悪み罵ていふことハいふ加へし万葉集には鬼をよめり後漢書に凶醜之人と見えたり○薦にいふハ矢壺の音ならへし水滸傳に箭壺の字なり或ハ尾鞘とあり足利殿の頃獵場の供奉にもちたるものひの尾鞘といふもの三絵一統に

しんしたりえびすの也とぞ

しこづ　新撰字鏡に譖をしこめ人と醜悪をもよめり又法花経にもしこと
すゞつ也といへり止観にハ枳をしこつとよめり

しころ　兜鍪をいへり鉦をよめり日本紀に頸鎧とみえたるも義によれり
るけ也といふと説文によれはしころなるへし正字通に説文鉦鍜頸鎧也或曰
盔之後垂者以首鎧之次故从金とみえたり錣をしころとよむハ字書の作
義によれるす或ハ鞆鞠なとの字もまた通して得も

△しさる　退行の義にや後去の義なるへし〇わとしさりハ逡巡也〇
信濃水内郡にしさり村あり飯縄山の麓なり

△しゝ　万葉集に鹿をよめりしゝといふは宍也〇肉をよむも都ていふ
なりや〇神代紀に獣をよむ〇魚肉をいひ肉合といふも皆獣をさしていふ宍肉
をよむも同し〇大祀の散斎致斎に肉食を罰せられし事律に出
たり太古ハ神にも奉りしなるを中古より穢に准へたり鹿を穢悪の
物と宣ひしハ世記にみゆ神道聴説に穢なりといふは非也〇猪鹿をもよめり

しゝといふハ雉をもかりといふが如し鹿ハ仁徳紀猪ハ崇峻紀にみえて御巫
国にも猪鹿をもよみ也代ハ水鳥雉なとを用ゐられて事類聚雑要にみえたり
淑夷にてハ熊をしゝといふとぞ〇獅子ハ音を用ひ又からしゝともいへり利未亞
乃地獅子多し雄鶏車輪の声を畏れ遠く逃るといへり〇香鑪にいふハ狻猊
なり獅子にあらず〇出雲風土記に猪像追猪犬像其形為石无異猪犬とみえて
伊賀阿拜郡上柘植に社ありて石獅子をまつる神体とす本紀に二尺許なる自
然石なりとぞ太宰府都府楼の旁に獅子岩あり元亨釈書に座上大石変為獅
子とみえたり〇南史に師子国天竺旁国也とみえたり〇しゝむらハ人ひとといふ語にも
神祇にもあり猪鹿をもよみいへるなるへし梵書の獅子身中の虫と混しいへるも
謬なるへし師子身中虫の事ハ蓮華面経にみえたり〇小児の尿をいふもしゝと言ふ
なり又小便をしゝといふも病源にみえたりしゝハ此義之をもいへり或ハ袁氏の説に二便を
しゝくといふ唐話也といへり〇師資の字ハ後漢書にみえて老子より出
たり〇四至ハ四方の眇目といへりて朝野群載に定四至てみゆ四履も同し

しゞ　小児の陰をいふ皴也指似の音といへり朘も同し朘ハ縮也とも注せり

しゞむ器なるべし

しゝや　日本紀に獵箭をさつやとよめり獵せし野矢也といへり○塵袋紀に鹿屋ゐる
と記して猿の皮のうつぼに鹿矢あまたさしてと見えたり

しゞ祢　無根の器の字のあるに葦のしゞ祢のしゞ祢やいかなるとみえたり

しゝむら　和名抄に膸をしゝむら肉腕の義なるや

しゝぶえ　鹿笛也狩猟書に女の鹿をけうとうしてうきたる鹿笛には秋の鹿必ずよ
るとあり今は鹿の耳皮或は腹ごもりの皮を用ふ又蝦蟇皮を勝れりともいひ
是り太平廣記に以鹿心上脂膜作簧とみえて遼志に七月上旬射鹿夜半令
獵人吹角倣鹿鳴既集而射之とみえたり

しゝまひ　日本紀に棲遑進退をしゝまひとよめり繁舞の義なるべし俗語にさんまひ
なるぬといふは詩の進退維谷と同じ源氏物語り
いくそたびきみがしゝまひにまけぬらんものいひそといひしぬ数ごとに
一説にしゝまひは無言の義なりとあつかまへりともいへり○獅子舞は陳氏樂書
に唐太平樂亦謂之五方師子舞とみえたり元史に伶人家丞毛作師子舞

以迎駕とみえたり西涼伎も同じ伊勢の宮には法楽に師子頭ありて外宮の遷
宮毎年舞し他は数年を経て一度まはしありといふ神楽の師子頭より事
起り隼人の狄舞を摸したるなりといへれどもさだかならず詳にせず

しゝびと　神代紀に宍人とみえたり皇代紀に宍人部あり魚肉を割烹する者の
称也さればも死者の事に就ていふ事は霊神をあがむるに用ふる成べし魏志倭人傳に
始死停喪十余日當時不食肉といふは喪主を指ていふ成べし

しゝぐしろ　日本紀の歌にみえ万葉集に宍串呂とあり無釧の義にて美とも
好ともてけりといふ伝説には串に刺て炙る肉は甚味うましきことゝみえたり新
撰字鏡に遷を宍のくしと訓せり字は不詳

△しすね　兼久記に自水とみえたり自ら水に投ずるをいふ今入水といふ成べし
○薪水を親くすると自燃といふ

△しせ　日本紀に殺をしせまつるとよみ或は已が夫を殺せをいふをしせせん
とよめり古事記の歌にいのちはなしせとなひそ又ねなしせんとよめり志
なせを約めたる辞なり

△そ　栄花物語に大二ハそといふ物とみえたり延喜式に大臣家大饗蘇
甘栗使盛折櫃二合一合、蘇大二小二一合、甘栗大八小八とみえたり西宮紀
に勧盃三四献間羞飯汁物裹焼薬甘栗とありて薬ハ蘇をさすなりと和名抄に
蘇密煎とありも是なるへしといふ蘇酪なりしを後に紫蘇を蘇と稱するや同しきに
蘇四壺ともみえたり式ハ巳蘇の字の如し蘇ハ酥に同し○類聚国史帝王部
貞観七年仁和三年此下に貢蘇とみえたり延喜民部式に凡諸國貢蘇各
依番次其取得乳者肥牛ハ日ニ大八合痩牛ハ減半作蘇之法乳大一斗煎得蘇
大一升とみえたり梵書に生蘇味を方等の時に喩へ熟蘇味を般若の時に
喩へ醍醐味を法華涅槃の時に喩へたりかくも云ふ蘇酪をいふへく今の典薬寮の
下に薬戸乳戸西宮記に乳牛院典薬別所とみえたるも是也類聚三代格に
和薬使主福常習取乳術ともみえたり古へ量に大小の異ありゆゑに大をいへり
さて其用ハ内蔵寮式に正月最勝王経齋會講讀師及僧綱各施蘇一壺
干姜三両とみえたり請雨法式に以牛糞塗壇場地以牛乳酪及粳米食請
雨法師といへり大雲輪請雨経にみえたり又南尼華羅國祭牛糞をいふ

冊三才圖會にみえて咒師一日不食若不忍飢唯得食蘇と馬頭儀軌にみえたり
○紫蘇ハよ氣を花紫蘇といひちりめんと呼ぶ是也○緇素ハ僧俗をいへり
そぞく　退く義也古日紀にみえたり○族ハ氏
族の義なり
△そさ　舌といふ義にやなとたと同韻通せり三寸舌といふハ漢書に
みえたり○笙簧の管なとハ簧とよめり礼の集説に簧ハ笙之舌とみえたり
○下をよむハそさろの略なるへし○前にそちハおもひそめけさりしといふ
そでとさしていへり○小舌ハ字音の転也又子舌とゝいへり
そさふ　古事記に見ゆ慕をよめり意も同し後にすさふといふに同しかるへし
そさす　浸をよめり沈下の義なるへし
そさは　倭名抄に前夫をよめり今もそれとして名くとありいふあり
そさひ　万葉集に下樋とみえたり紀にも下に下樋也といへり暗溝の義なし
○笋をいふも下樋の義也笋の腹の中の樋に似たる意なりといへり○万葉集に
金山のしたひが下に鳴る鳥といへり古事記に秋山の下氷壯夫といへり伊豆志

袁登賣とよめる神也式に丹波國船井郡志多比神社出石鹿岴部神社
あり平氏太子傳に下紐君形物なりといふ下千比袮陀志てしみたまふ
といへるを訓べし又万葉集に秋山のしたべる妹とみえたり紅葉に匂
ふ義なりといふ○下樋小川ハ伊勢飯高郡にあり下見樋も同所にて松
坂の巽方櫛田の西方岸江村の東南の小川是也齋宮群行にはこゝに到りて
鑾鈴を止めて行也といふ延喜式にもみえたり是を前の古名なりとして
今のおもゐ也○万葉集に見ゆ下樋山ハ津の国能勢郡にあり

したがふ　従順をよめり下に付くる義なるべし遵も同じ

したさき　詩に婦有長舌維厲之階とみえ朱傳に長舌能多言者也とみえたり

したぐみ　萬葉の義之素葉集なり
方にさくみつれしハ乃したぐみ葉の恋しき世をかひ寐まゆり
是ハ然かしハ乃したくみなり方にそくぐとい世の伊勢記にいふ是かしハとたの
おの一葉をちそぐ哉をはなそそくとみえたり

したうち　新撰字鏡に咜をよめり礼記の咜含もしたうちなるべし

したつき　延喜式雜薬の中に舌附とみえたり○倭名抄に彈鼓を訓せり
舌不正也と注せり源氏物にもさすがにしたつきてとみえたり

したくび　倭名抄に胡をよめり咽下の垂肉なり

したくら　下鞍の義なるや或ハ韃をよめり源氏に御随身どもしたくらおろす平家
物語にみえ源氏にもしたくらあるものとみえたり○軍書に男猛の徒をした
くら者といへり

したしむ　親をよめり下添の義也下ハ和を以て和する意通し神代紀なり
篤愛もよめり

したひも　志名伊勢物語に下紐とありゆふひもともいへり下裳のこしと
いふ同じ日本紀に衣紐をよみて常に結ぶをばぬるとともい下帯の義かとも
かるす○人に恋らるゝ時下紐のとくるといひならハせり万葉集に
見えたり古今集に
めづらしき人をみんとやしかもせぬ我下紐のとけわたるらん

○相摸集あり

しろくちるにいづれ解へきを定るの片結ひなる義まれ下紐も
二ハ万葉集なり
ひとりして結びし紐をひとりして我は解みすただにあふまでハ
伊勢物語なり
二人して結びし紐をひとりしてあひ見るまでハとかじとぞ思ふ
乃意にて古事記に汝所堅之美豆能小佩者誰解ともいへしになぞり小佩も
下紐之◯なまいふハ伊勢物語にいへる心は
紐てなりひ結てなるむすべきなまれ下紐いふなりしめくくり疎
◯下紐の実ハ奥列にあるといへり
しぶらし　文選に數眉をよめり意らし此義如へし
したむ　古事記に譖をよめり字書に知也とみゆ文揉をよむ字彙に調也
治也とみゆ下認の義なるへしいさよひの日記に新の双紙をとそえりしたさ
あめとみゆるなり
したがさね　襯をよめり物に下襲ともみえたり袍の下にかさぬるをもて名とせし

なき世のふ下着之裾ハ此裾也
したかま　新撰字鏡に褌裩幝をよめり口大袴と注せり装束略抄に下
袴とみえ又後綾とよむへり
△しぢ　新撰字鏡和名抄に榻をよめり車の床をひきとむる具なり
されど榻字ハ車にのみかぎるへからず唐韻に床也と注せり
しぢのはしがき　昔し男の女をなりひらけて九十九夜まてかよひて車の榻に
数をかきつけし百夜に満る夜ある事なりとそいひつたへたり
俊頼の説歌袋抄にみえたり
於とひらるやしぢのはしがき百夜かき同しまろ寝せんとは
△しづ　賤民をいふハ沈淪の意にや又下男下女を略していふしづ枝しづ鞍
乃如しといふ万葉集に倭文手纏いやしき吾ゆゑと云もしづの意
しるぬともよめるハ倭文に織をいふなりとそよめる◯倭文をよめるハ沈の義
万葉集に下にふかくへの志づのをだまきくりかへし古へを今に
見る今ハ神さびゆるなるへし釈日本紀にも正中御飾記にもそれを此

ごとき旨なるべし○おもしといふ機の錘(オモリ)をいふ也所謂鎮子也源氏
にかけ絡帷屏などなるべし○下玉の緒をしづといへり
しづむ　沈をよめり下に積る義なりや○雫をよめり義同し神代紀に垂をしづく
しづく　下に垂る滴をいふ万葉集に志づく白玉志づく石などいへるハ用にいへる
詞なりそは沈字をよめり點滴をいふ也雫字ハ字彙補に見えて
義をうけり西土の書にも見えず雫とよめり又六帖に雫を一の題にたてたり○
古今集に志づく花の色をよめるハ雨脈絡の意也といへり定家卿ハひとさ
るやうにて水際にゆられてかくれ行とみゆるといへるを是ありとしづくといへ
る訓義也や○滴(シツク)田稲ハ龍波山の麓にありて雫田と作るといふ万葉
にも見えたり
しづか　神代紀に寂然又閑静をよめりしづめるもしづまるも皆しづむの義なれ
ハ鎮と同し新撰字鏡に靖をしづけしとよみ又粛をも點くをもよめり志づ
けしハ万葉集によめり源氏にしづやかともみえたり○義経の妾の人静ハ勢州松
村の白拍子也舜の唱哥ハ後鳥羽院の御作なりといへり吉野山藤に流波ハ静を

擣によせしなるべし
しづわ　鞍にいふ後津輪の義前輪に對へていふなり
しづり　倭文をいふしづおりの略なりしづともいふべし
しづはた　倭文機の義日本紀の哥に大君の御おびのしづはたとよめるハ帯な
るべへも着るなりとて神代にもよまれる也夫木集に
しづはたハうるふみだれそ折ふし忘しかたてぬるかにして織る衣なり
○しづはた山ハ遠江也那波氏東山道紀行に見えたり風土紀にハ駿河安
倍郡に入て或ハ青葉岡といふともみえたり
しづぬさ　万葉集に倭文幣とみえたり倭文を幣とする也又神の社にてる
鏡志づにきりそへてかけてもみゆ
しづくら　倭名抄に移鞍をよめり下つくらの義也万葉集にもしづくら
にしづくらを打並とよめり
しづうた　古事記に志都歌之返歌也とみゆ志づハ静なる義にや反復し
てうたふをもて返しといふ成へし後に至てうたをうたふ其部名を名け

て何歌といひても又しげきとありもなくとかり
しづか　しづやか治語に深沈なる事といへり
しづこゝろ　後撰集にしづ心なくとよめり結句の義定まらず造神がたに緩
文は太神宮と云る是もしづ心なくとよめりよりて心ざしは静心のまゝ迄
しづりのゆき　新撰などにより積る雪の落るをいふて落りて静なる
義なる哉し
しづのをだまき　古今集にみゆ倭文の苧環の義倭文布を織ん料の巻へ
子也是を万葉集には倭文手纏とよみたりよりて数にもあらぬとつけ綴に
かりていやしきともよめりよりて倭文は古へ帯抔にも用ひ卑しき物也
しむ物はなしとすといへり○式子内親王の哥に
そのかみの昔にもかへらぬ秋風やくりかへしてもしづのをだまき
とよめるは昔を今になすよしもがなといふ古歌の意をひきていふ也といへり
△して　而字為字将字抔をしてとよめりして反せし如是せよとの辞也かくして
ともよめり文字而字之字とも不断で連る字也之字は語直につゞく而

字は語折てつゞくといへり志名伊勢物語に左字を而乃義とするは甘心
せられず○ぬしてといふは師手也能ある師手脇などゝいへり
盛衰記に知康(トモヤス)はくらやうなる者にてつゞみ判官と呼名によひ
なりとみえてしかれども師弟の義なりとや
しで　日本紀古事記に垂とよめり垂て也木綿しでなどいふ意なり
又榊葉に木綿取しでてとも見ゆ万葉集に結字もよめり西行法師が
かしこ浦るしでにかけたる又みなかみに神なかれ
とよめるも木綿しでといふなるべしいつきもし加茂社をかけたり雑髪人の拝
所は棚尾社也日吉も大宮へは舟路にて人かよふ台家の前にありと○
しでの浦　万葉集に伊勢の鳥羽朝明郡羽津の西にしで浦しで野の名あり
是なるべし延喜式に志氏神社あり今しでの杜といへり○しで和右
野にしでうけの明神ましませり
しでのやま　十王経に死天山門集鬼神とあるにより逝てかへらぬ道
しでのたをさ　袖中抄に倭の田長也郭公(ホトヽギス)の異名也あまりて過時不熟と

鳴也といへりたゞさハ田事（ソサ）なるべしまたをさ〳〵例あり古今集に
いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさを朝な〳〵よぶ
枕草紙に田歌をのせてほとゝぎすよかやつよおれなきてこそわれは
も田にたつといへり格物論に杜鵑三四月間夜鳴達旦田家俟其鳴興農
事といへり○伊勢家集にしでの山越てきつらんほとゝぎすこひしき人のうへ語らなん
天の山からくるらしねなくといへり古へより悲哀の声とし慶賀の席に用ゐ
ぬ諺もあり哭せしといへり死天の山より来るハ蜀の望帝の故事也一名
蜀魂とも見えて蜀都賦に鳥生杜宇之魂とも見えたり冥途より来るといふ説も
△しと　紫式部日記清少納言に小児の小紋をといへり今しと〳〵といふ是也しとし文
かるくしく細流にしとと訓てけり
しとり　高橋氏文に倭文又文布をよめり天武紀に志取部ありしとりと見ゆ沈織の義没
あしつれ又さし綾織の義といへり綾者をしづといふハ倭の事也新井氏ハ東宗
乃俗筋をしづといふ釈日本紀に有青筋文之布也と見ゆ筋ハ今いふ縞筋
のさ波かくへ名ハ魏志にいふ班布是なるべしといへり文布ハ唐書日本傳に以

文布為衣とみえたり又神代紀に倭文（シトリ）神ハ常陸国にまつるよしみえて新撰楽
記にハ常陸綾甲斐班布と見えて常陸風土記に静織里上古之時織綾之
機人未知之此村初織因名と見えたり
しとぎ　童蒙頌韻に粢をよめり倭名抄にハ粢餅とみえたり新撰字
鏡にハ糈をよめり白磨の義なるべし今も精米をしとげといひ米をひたし
ふきさくといふ筑後の俗祭祀必す粳米粉の餅なり是をしとぎといひ
婦伊勢の俗白（シラ）餅といへり○蝦夷の女ハ頭に銀鏡をかけて飾りとす是を
しとぎと名くといへり
しとみ　倭名抄に蔀をよめり又蔀に作り日本紀に障子をよめり下此
義なりといへり又釣蔀あり檐に釣かけておくをたゞしとみといふもの也○式伊勢度会
郡に志等美神社あり延式帳に蔀野井庭神社と見ゆ
しとね　倭名抄に茵をよみ又褥をよめり下寝の義なるべし畳茵錦茵
唐褥茵薫爐茵早帰茵など源氏に見えたり錦茵ハ唐詩にも見ゆ○新撰
字鏡に鋳をしとねとよめり字詳ならず

しとやか　しとやかは都舒徐なるにいへり閑雅とも訓せり

しとだち　倭名抄に章断を譯せり顔氏家訓に注連章断とみえたりし
とは小役をいふにや

しとりべ　日本紀に僮従をよめり古事記に従者をしとりべひとゝもみゆ
後執部なるべし

しとゝめ　腰刀の具にいふ鵐眼の義なりといへり和琴及筝のをにいふも
同し倭源抄にみえたり

しどけなし　無静氣の義なるべし東鑑に無文度解とも又無四度計と
書せるはいふ職原抄に勘解由諸國參期曰四度解とみゆ小町家集に
しどけなき紀くるゝの髪をみせしやなかなかなるけるの錦
源氏に常しどけなくとみえたり今もいふ詞なり朝野群載に四度
公文帳みえたり

しどろもどろ　源氏にしどろもどろに愛敬づきたるも彼家なり
歌にしどろもどろに戯に多く詠めるをみよ

下学集に取次筋斗を訓せり杜詩に經過自愛惜取次莫論兵とみゆ邵康節に
取次挨次而去也といへり次てのまゝに推て行事をいへりされはしどろの
意なるべし後鳥羽院御集に
いかにせんくれやの杉の端に風をそしどろに荻の村雨の露
日本紀に帯山をしどろむれとよめり百済の山の名なり又しどろは韓語成
るべし埃嚢抄には紊次をみだりがはしとよめり教坊記に一小児筋斗絶倫と
みゆるんだがへりしてありといへりされはしどろは日本紀に文身をもどろけて
とよめるも筋斗に非るべし

△しな　階級品科等の字をよみ日本紀に色字文選に器新撰字鏡に層
又陵をよめり俗にすぐことを品をもいへり○支那は天竺より漢土を
指の語なり名義集に此云文物國とみゆ○氏をもいへり志那範重は近江佐
佐木氏の族也續に山清宗鑑ともいふ○雄略紀乃寄りいはちしなましとみゆ
死の義なり

しなひ　神代紀に莫然をよみ文選に無字又蔵蕤又扶疏颯纚なとをよめ

に伊勢物語のしのぶ草に蘖字を用ひり柳のしなひ藤のしなひなどのしなひ
なといふ是なり万葉集に春山のしなひさかりて又立しなふ君がすがたとも
よめり後をしなかしといふ詞あるべし○商人の詞にしなすといふ相為合の義なるべし

しなえ　万葉集に君に恋ひしなえうらぶれ又萎草の思志萎而などよめり
志ハ発語萎の義なし源氏に見えたり

わらはしなえうらぶれの蛭の子の脚立ずと見し義に類せり

○笞杖の類をいへり蔓枝の義なるべし

しなと　塩嚢抄に人を待さするを下臈ハしなとさせよといふ宿をよめり古今
かよはず我帰てしなてやせまし是をゆめぢにしなるあるを
みちのくのしのぶのまぎこともなくに若をしのびてこゝに我待ん
しなくてより匿字のよみなるべし旅人君を待てしとよめるハ非なるべし

しなめ　日本紀に匿字をよめり新撰字鏡に図をしなぶとよみ取物而藏
と注せる是なり

しなの　信濃国ハ古事記に科野とかけりしなの本ハ風よりいでる地なるを白し

よて郡名にも名にもしなと呼もの多し諏訪の郷なる岡を構へてかぢの木二
株を植たり古葉く又かぢの葉を神紋といひ伝へり一説にや一説に
まて階坂といふ地なるべしよて名くといへり地形ハ日本中の高き所なりして
四方の険なりまつまはいはぬなり○しなの菓なりしなの葉なり○信州に
稲茶竹三種生せり今ハ伊那郡に大竹を生す○万葉集に科の海信濃の
濱とよみしハ信濃に海なけれとも信濃の濱といふなるべし○信濃の宮とや
なと上野の宮ともいひ井伊谷宮ともいへり後醍醐天皇第三の皇子にて元弘三年
より征東将軍に補し東国に座しませり後年河内国山田荘に閑居ありまし
新葉集を撰て奏せられ又終に井伊谷に隠れさせ給ひ七十三歳にて薨し給ふ

しなやか　源氏に見ゆ河海に白氏文集の差是をしなやかともいへり文選
の長袖颯纚をしなやかとよめりしなひやかの義やかハ助語なるべし

しなてる　万葉集に級照とかけりしなてるハ片といふ又級照る片
といへり日本紀に片岡山につけ万葉集に片足羽川につけり○源氏にしなて
るや小ほの水海とみえたり是ハ古事記にしなてるゆふさてあみちとよめるに

同しといへりたゆへはたゆむに同し
△しなくだり　日本紀に差降の字をよめり新撰字鏡に除をしなくだりともよめり禮記の降等をしなくだるとよむは非也といへり
△しなさだめ　日本紀に考選をよめり品定の義なるべし源氏物語雨夜の品定なといふ是なり
△しなてるや　古事記の歌にみゆしなてるはしなゆむの義にてさしなみちと続くあり小竹とうけたる也といへり
△しなどのかぜ　中臣祓にみゆ源氏にそれはつくみなしなとのかぜはたくへてなと云り神代紀に級長津級長戸邊を風神と云り口訣に飆飆云級長とみてよめり飆飆は野分の風也と云り又乾風を以いぬゐと云り源順集に穴井端をしなとの風は吹らくかくれや志なしとまると
△しなせん　死せんの義也しなせぬは死せぬの義と云り拾遺集によめり
△しなぬ　日本紀に死ぬをよめり哥にはいのちしなましとよめ去の義也　反しなの音にかよへす一級に過ぬ也すぐ反し之神代紀に神去といひ死をまかるとよみ万葉集に過去人とよめるなるぬ称のしすせそたもなりけり
△しね　日本紀に稲をよめり米をも訓せりしといひ韻通せり又神代紀に秋垂穎は八握莫々然と見えたりしねはしねなる也詞なるべし○和稲荒稲祝詞に為米を和稲とし穗を荒稲とするも
しのくり　蓋目の義なるべししのとは篠をいふ蘸は芦の根を含むものにて其声似たり乃ある音に似たり故にかくもいふなりと三河一統にみえたりひくめともいふ蘸をしのといふ
△しの　日本紀に篠又小竹をよめり志及ふの義なるべし又小篠の義也といへり○更濃まて紙の本の法をひきなるとまれといふしまの称にや○綿筒を園東にてしのといへり○万葉集の篠の原の府は那賀郡濱田の城ある編はやれの鴻といふ新万葉集に伊勢の玉篠名といひいふ志摩玉営生乃門の篠間あるへし後撰乃哥にまかれ海に志のあまの海士のかつくてふなめる所也○篠村は丹波桑田郡亀山城の東源義経を征せし時延郎に充て衣盃資よる篠村八幡は尊氏の始て義を倡ひし所也○小竹宮は和泉國和泉郡尾井村有

舊趾なり神功皇后三韓より帰て此に渡しませり○篠原ハ加賀にも也源義仲ら
平維盛卒通盛等を征し所又近江の篠原ハ平宗盛の斬られし所又篠田の社ハ和
泉和泉郡信太の郷大村にあり
しのの　万葉集に志努のともよめり志のに物をふ志みり露ちる也都ハ志のふの義
なり繁き義といふなり
志のぶ　唐に偲と訓す字は名ま義を辨へ看るべきなりこそ日本紀に忍字を
よめるハ偲の字のこゝろへ承宗堪忍の義なり顧字をよめるハ顧念の義なるの
ゝ又万葉集に思字もよめりひそかに思ふの意なと見えて思哀をよめるハ慕ふの意
なり万葉集に偲字をよめるハ二合の義なるへし又日本紀に悲歎をかすしみ志
のふとよめり悲哀の意なるを推すべし陰謀をしのびことゝよめり毎に志
のびの若きなといふも此意隠居をしのびがくしとよめり又密をひそみそかの
義古事記に忍びくといひ志のび妻志のぶ意なとも此義之秘をよめるも同し遊
仙窟に偸眼をよめり万葉集に惻隠をよめるハ惻悲のうちなれハむつびしとよむ
ふ愛情をいふなり海篇掌珠に恋ハ恕之と見ゆ文暮を義訓せしハ下組の

いふをさへなり霊異記に詠をしのびとも志のびともよめり詠嘆の意之○
しのびの岡ハ武蔵にあり東叡山の地是也○信夫ハ倭名抄郡の部に国分為
伊達郡とみて郷の部に伊達郡信夫郡をもまた安達郡郷名に伊達見ゆ今
信夫伊達ともいふなり
しのゝめ　万葉集に細竹目とよめりしのゝめハ曙也又篠の群行の義也といへり○
東雲をよめるハ暁の雲の細やかに細かなるを篠乃葉にたとへいふなるへしといひ
又神代紀に細開磐戸窺之とみえしも是志のゝめの略り言の本也と
そ○万葉集に志のゝめ草ハ樺なりといへり
しのびで　延喜式に短手とよめり又短拍手をもみゆ志のびかしハてといふ是之
類聚本源には忍手とあり
しのをと　倭名抄に清器を訓せり尿の器之類聚雑要に私筥と見ゆ今
とかをいふ小厠のかあるべし説文に楲窬之国語註に窬行清厠也と見ゆ
しのぶぐさ　忠草と書き萱草の古今集に忘るる人ひとりよいふとも志
のぶをみえに出し世の人にしのぶを恋に出せり

しはびのを　冑よりかくる緩の緒也縲布を用ふといへりされど古名ハ後世の事古ハ
織物に綿入て用ふともいへり又兜の内にまきて髪にくゝり付る趣なり今世
よりいふハ兜の緒をもいへり○大坂落城の時に木村長門恥かしき死かして
検視公に討死をとゞめて出るよし伝ありとぞ本田氏叔父乃三也よ治
られけれハしはびの緒を引結びて捨たりといへりとぞ醍醐
随筆に記せり

しはびあゆき　伊勢物語に見ゆ濡たる衣をいふ識ゆけあり

しのびもぢの　陸奥の衣道形をいへり昔より伊賀甲賀に忍び乃達人ありて
家に伝へり○忍ぶに隠形の術といふ事見えたり○游偵姦細も同じ

しれやうさるむ　語類にも行きぬけめて切口より出る息をまて語れ
乃ゆがみをなほすをいふといへり

△しぼむ　古今集に今しぼむとよめるハしぼむの義也○日本紀に枝葉をよ
めるハ梢の義なるべし倭名鈔の名に標葉をしばと訓せるも義同じ萬
葉集に柴まとふ小歴木ともあり今も柴刈といへり柴の字ハ郷談正音乃

見えたり○草莱をいふハしばなまよる紹機字鏡に萌をよめり又も繁茂の義
なるべし一説に菲茅の音義也といへり萬葉集に乃しばくさ紹のしげさに
庭乃さゝなど見えたり結縷草也といへり中山傳信録に芊草如茵極細軟
柔結寸許連土不散布滿山上と見えたるも同じ芝字をよみ来たりし字書に
も義なし古へ莱と通用せる訣なるべし又ここそ聖武紀に内裏生玉来と見ゆ
るハ莱音来なれハ玉芝を玉来と書せしと見えたり○童戯芝といふハ瓦
松也外科正宗に瓦楞花も同しといへり○氏姓に斯波とあり又芝田なり
○古語に司馬の野ハ国栖になり

しばし　日本紀に且をよめり苟且也今瞬息の意にいへり

しばる　縛字をよめり縶張の義なるべし集韻に紲以縄維持之と見え
たり○しりへでにしばりハ反接也

しばれ　十二月をいふ寒極るの義なるべし萬葉集に昨日社年者極之賀と
見えたり俗に此月を極月といふもしはすの義を誤れるも寒終といふなり

しばらく　暫をよめりしばらく反てしばしなるを略せる詞なるべし姑をもよめり

姑且乃こゝろ神代紀に須時をしばらくとよめり聊をとよむも苟且より
轉せるなり頃之もよめり頃ハほどなりて也さ少ハ少時の略也斯須
須臾少間なとも同し又居頃とよめり居無幾居無何と見えしも同しこゝろ
又少選とも見えたり

しばく　頻とよめり新撰字鏡に亟また屢も同しともしば数くと見ゆ
神代紀に數万葉集に數くも訓せり法華經に見ゆ驟もよむべき也けり
源氏物語り
ふるの山かりにかけしばくもてひかへたる里人

しばふね　柴を積る船なり
○源氏に柴つみ舟ともいへり○後撰に柴舟もよめり
しば船も先こゝに舟もかゝりけりあら浦風のふきすさぶらん
○本朝故事因縁集に出雲國大泥村に廣池あり毎年薬師佛を安置して
四月八日に祭を行る先芝に小池の端に臨んで太に到る時に芝に乗て人みなと
さけて池中に浮て出ゆらめく其処を芝舟といふゆるく抽ひたまへると呼

いふ暫くして其芝も見えずなりぬ池に岸つくといへり

しほはゆし　鹹をよめり塩映しるき義也塩をはゆると見ゆれば醎をもはゆし新撰
字鏡にみづさわがしともからしともよめりみハ水を云す

しびゆばり　倭名抄に淋病を訓せり數尿の義也淋瀝をしたゞりゆばりと
いへりしたゞりの義なり

しはぶるひと　源氏にもかれをふるやしき紀にしはぶるひとゝもいへり
抄に老人をいふとみゆ小治乃ま里ひにしはぶれしはぶる人さへうちゑみてと
みゆこゝろは咳ぶる人まてる也と見えし

△しひ　強字をよめり孟子に強酒といふ強ていつよくといふに同じ誣も同
義之萬葉集に見ゆ神代紀に固もよめり○椎も諸書にしひとよめり
古事記ニ神代紀の旬ハしひとよませたまへり小町の謡にいふひかへひまて
ハしひとなるべし香椎ともかしひといふ音を約して訓せる
なりといへり椎の實の義なるへし古今集にも後世の字を椎比都と
よみてひのえをかくせる事なり参河苅屋の城をよめり

貢らるゝと最上にいへり○新撰字鏡に椹をあつしひとよめり薩摩にてしひハ䴈
櫧也○筑紫の方言に鉄脚といふハ貝の形椎の実の形なるをいふなるへし
しひな　倭名抄に粃をしひなせとよめりせいの実のなき也しひ
てなきる義なるへし○挑更を空腹をもちしひといふ○浮縁をてしひあ
はきとといふ
しひし　新撰字鏡に楠をよめりされと字鏡にしひしと訓り俗に族字をよめる
ハ小竹の義によれるにやしひし箱絡ハ戦掌の始礼にも必すこれありと
いへり強篠の義なるへし
しびら　源慶抄に褶也といへり源氏にしびらといふものとかけりしびらハ裳の
事く男ハ袴のよそさ也女ハから裳のよそさなりといへり倭名抄にしびらみと
見え日本紀にハひらびともひらおびともよめり
しびり　痺也といへり澁る義にや麻痺をもいへり○しびり薬へとことふ締綴
けり笑府に俗云脚麻脚麻上鼻頭謂以柴芒貼鼻端即止と見えたり
△しぶ　柿漆をもしぶといへり澁る之義の菓蔬の類にいふも之同し一説

に志ぶの音を轉せし也○四分ハ長官次官判官主典也
しぶく　拾遺の義風しぶくなとといへり○船にしぶくといふハ帆をさげす
にかくぬるをいふハ澁る之なるへし新古今集
る瀬川しぶくだかりにとみち義の方にてかるかなる川な
しぶふ　澁をよめり俗にしぶくふといふ荘子に疾則苦而不入とみえたり
苦もしぶりかなよめりさるしぶきといへり或ハ擀をよめり○志武志ハ薩摩の
地名武備志に見ゆ
しぶかハ　柹といふ尓雅に穀皮之と見ゆあまかはともいへり
△しべ　心蘂の音なるや蘂心をわらしべといひ花蘂をなれしべといへり後拾遺
集になれしべ紫の下薬と見えたり倭名抄に蘂を訓せり○緒なも類聚
雑要に志倍と見ゆ
しへたげ　虐もしへたぐ寃をよめり今せたげるといへりしへ反せく
誣せたぐるの義にやひせ反へ也霊異記に弊をしへたげとよめり
△しほ　塩といふハ白穂の義なるへし万葉集に鹹塩と見えたり祁代纂疏

よハ塩土老翁始て造るといへり又は宿祢氏より始るといへり出雲国古
語拾遺にハ大巳貴神より始るといふ神話なり
志ほ汲人のかたらひせむまて有とぞいへる素鵞の里人
あふごのかたハ枡の束をいふ也新語より出十四狭小汀とあるも乃浦と称すといへり
○奥州伊北郡用輪庄に大塩といふ里ありてそこに塩井あり海へ塩
を焼る業とする民家多し海へハ四方二十里に四日路なりといへり西に
法師也寺
あまをふく浦あまたして陸奥の山かけの家むら大塩の里
古今集に志ほの山さしでの磯とよめるも甲斐の国甲斐ハ海なきに
在山に溝ありて塩出るといへり伊勢飯高郡丹生に近き川に潮汲ありて志ほ比
といふ見るは志ほ田山其名を志ほ谷といふ者あるしかりしなるへし凡そ
海へ至て近き所西里余許なり弘法大師の奇特とぞ
細ひびの南の浦にさす名の八丹生の間の比みをさしたりあり
菅原村近くをさふ細ひびといふ所なりとぞ大和吉野郡大名持神社鳥山に

なり八尾座村に属せり社前に潮生湖なり昇て二十一月晦日潮水湧出るといふ
又下野国塩谷郡塩湯の庄遠江国掛川の近き所に出るをいふ河内国錦部郡桜
山塩穴寺の塩石皆石塩也○しほ志ほと称せらる印塩也近来紅毛より戎塩
を出す青色也○塩焼ハ男の業塩汲ハ女の業なる西土の風も同し○朝しほハ
潮をいひ夕しほハ汐をいふ也○七月中旬の汐潮の其ま溢るを盆潮といふ西土杭州
にハ八月十八日大に潮至る是を浙江潮といふ○あれハかゝる所の時名を志ほといふをも
潮の据りより出るなるへし月の出入ハ月輪のかゝりし志ほ落るといふ是之○入しほ出しほ
味の塩をいふ塩の名もしまよりいつるといへるハ入の故也のよりきたるゆゑ来へし一説に出
の比音偏あるをもいへり○いため塩類聚雑要にみゆ自然塩といふハ讃岐国の田郡
潟本の産鹵地に海水をそゝぎ日に曝す数次あるを其上を待て刮取海水を
もて淋滲しこれを鍋にて煎塩といふ又池中に貯置ハ其底に自然に凝結し
たるをもむすて小豆島土庄の産も亦同し本草に呉録を引て婆斯出自然白塩
如細石子といふに同し俗によぶ志ほといふハ紅毛人持来るものなり○塩津
ハ近江浅井郡也義貞の皇太子を奉して抵る所也足利義詮も後光厳院を奉

しててふ小舟を○塩田ハ塩浜の訓名也淡路の浜之義政信列に開発せし時
塩田殿といふ又摂津にあり名寄に塩田此川とよめり又塩谷(シホヤ)氏あり
しほひ　難波てしほひとよめり新万葉集に見えし三月三日摂州住吉也浦々
群集せり旅泰住吉神社よりも此日潮干の景色ありといへり左右に櫻浪也硯石
を此日沖中まで打かけて取るといへり霏雪録に車渠三月三日潮盡郎出とみえて
うり今此人かひ拾ふまでも近し
しほに　折しほりして来るといへり塩入の義也や新撰字鏡に酖字をよめりと酖ハ醸の
総字説文に原酒也と見え古事記に八塩折(ヤシホリ)酒あり伊勢物語に濃まそぬきつゝしほにち
とよめり名の字なに塩流を塡ぐりしほてゝをんと言ふ少寔あり源氏に目をしほりつ見給
ふをといへるは老人年ふりて乏めりをしほて目を拭ひぬぐひてして見るなりと
いへり挽字紙にせみ数はしほり切といふも同し
しほる　縮布などいふ絞字なるべしかなみに袖をしほりつとよめる是もしほり
除去いふもしほる也なりあるべし沖をしほるハ榨字之酒も同し○伊勢物
語に含めて志保里と見え落窪物語にあまくしぼりとりしてあまえ

しほむ　萎をよめり縮をいへり又しぼみたるをぬるにもいへり凋も
同し新撰字鏡に瞟もよめり欲干也と注せり又皺もよめり
しほらし　塩らしき味あり出たる詞なるべし居家必備に女人醜陋謂之
無塩とみえたるに通へり
しほじむ　源氏に見えたり世にしほじむといへば訓なるにていへり又殺俗
ぬめ言り
むかしつゝきてこそ塩しみて入江のあしそかなしき世の中
しほたるか　源氏にいたくしほたれとみえたり遊仙窟に泣涙をよみ
齋宮式に哭称塩垂とみえたり涙垂をいふなるべし
しほがま　塩盤といふ塩を焼竈也明律に塩場竈丁人をも竈戸ともいへり
塩場ハしほはまを塩戸ハしほやをいふ也代酔編に塩竈此字見ゆ奥州塩竈の神
あり古代釜四つありしを七つありしを三つ八失たりとぞ　延喜式に
税式に陸奥國祭塩竈神料一萬束とみえて朝野群載に陸奥國浮島塩竈
馬海三箇社とみえ式外也○第此名にもみえ拾芥抄に出たり挽茶紙に八

和琴の名とせり○志賀がらさきハ馬先嵩也と云り○擬の示あるもいふ
まで及ぶありとの義也と云り後光嚴院御製
浦の名ところえハきさ濱奥の也ハ新縁よちつの塩竈
○顕昭いはく左中将乃みちのおくまで新枕せんとおもひし家御門の六十余州の内
あるき所の中に志賀がまの浦にまさる所はなしとて紀の國わかの浦
浦丹後の天のはし立めもわりなりとてもうつさせたまひ庭のまへに池をほり水
をうけてたちてこそかよひしう待るを○塩竈の町といふ六條融公の河原院に遷
所をて後寛平法皇の御所と成り六條坊門の南萬里小路の東也

志保じり　伊勢物語に不二の山の事をなりハ志保じりのやうになんありける　海
人の潮をくみ砂をたまきて後うちちらしたる塩浜といふ今もいふ綱鹵坩
也といへり一説に融の大臣ちうの塩かまを六条河原にうつし難波の塩をはこばせ
せて塩を焼くらしより京都の人のめづらしがりて其塩尻なるを饞物にし
て火桶に用ゐるをも同しく塩尻といひまぬるに移してたとへバといへりとぞ
近世志賀ありの香塩といへり一説に伊勢物語に鳴者とあり富士の塩浜

とて山上に池ありて水びたしく湧き川となりの海へ流入所を志保尻といふと
いへり鹽嚢抄に白鳥同様を打出て志賀よりさ海へあゆまするともいふハ塩源
小縣(チヒサガタ)郡に今も塩尻と云所あり所ハ筑摩郡之富士山也と云

志ほこり　新撰字鏡に潮をうめり○汗塩でさうらに塩水をうへ潮のみなれ
乃をなり伊弉諾尊の橘の檍原の祓除に始まり○大神宮に参るに家
二れ為居の下にて塩湯を用て大祓せらるゝ延喜式にみえて儀式帳にも御
調系を今編定御調櫃に入て塩湯持て清めてとみえて水巫にも御塩湯を
縁事桃柳塩三種以合為湯也以拂枝葉拂濯也とみえたり○二見浦のみ
そぎ同しかるべし○續日本紀に庭中礼拜天地四方共飲鹽汁とみえたるハ
盟約の古法なるべし非別記にも依豊玉彦之教與塩水飲之曰如背此誓約
者永盡于食塩者也此誓事起於津志磨島而後竟為天下之通規也今之
潮契是也といへり

しほびち　鹽斷の事婆娑論正理論などにみえたり

志ほやけ　海の焼て氣のたちのぼるをいふ荒海にハひくわたりてといへり　俳

和庚寅の大旱後七月廿八日の暮かたより七ツ比まで北に赤氣見ゆ京にては
若狹と見え若狹にては丹波と見ゆといへり一同の事にて江戸
人加賀人も云人伊勢人等も皆いふ一面に赤く其中より八間
道許て白き筋立て東西にわたりひろごり八九十丈に及ぶ人も
有りしといへり西国までは海の空事とも聞ゆれど此夏肥後八
代海にて魚鱗の光ありて赤しとも聞へり常人めづらしき事にいへり後漢書
寶治中に七月八日夜に赤氣見于北方狀如野火白氣雜其中並交其中蔽北斗
須臾滅と百錬抄にみえたるを述し通鑑宗徽宗建炎元年正月元日の
朝にみえたるも亦近し
しほのまつ　所の名也塩のまつといひしや應仁の頃より出たりまたしほくやく
なり杉の所の名の所をも香ぐはしと紀源抄にみえたり
しほやきあむ　塩を焼く火をふむ也實録をいへり丹後風土記に天女根和奈
佐老夫和奈佐老婦曰汝非吾兒荒塩を見たり後に志ほやきをあまたといひたる
同じつ線に火闌降命の潮滿瓊にだしなめらかに時に光を挙て溺若

れ帆を上げひく事あり出る潟あるといへり
しほみつ　神代紀に潮滿瓊をよめり又潮涸瓊をしほひるたまとよめり
しほのみちひ　潮は海の鋭也天地の氣數十二萬九千六百年其息壹夜に二
呼二吸也人息は元氣升て地沈むよりて海水溢る其息るは地より
ぬく浮るによりて汐ひるといへり
しほもやあひ　神代紀に潮之八百重とよめり○中臣祓に潮の八百道又
潮の八百會ともみえたり源氏にも志ほのやほあひをよめり○潮道といへり
く流るよりも疾く流れて其流れを潮道といふ潮道は八方より出で入るとも八
百會までも集まる又播磨と志摩と日向の潮道のあひ合ふ所をしほ路
へき也といへり南海の潮道は流るる船は留ることなく遂にかへらず其道八丈
を汐路中なるといへり
しほつちのおぢ　神代紀に塩土老翁とよめり潮汐の事をよく知りぬく人
と稱する名なる云人の稱なりといへり
△しほ　島嶼又洲字をよめり或は嶼をひとしく海と訓せる也字は志まる亦

也渚ハ水中に洲の出来たる也坻ハ水中の高き地也一説にしまみとよむ中洲の可
居の所をいふとて万葉集に八洲知といふを八隅しゝとかくもありといへり
梵語の四摩也ともいへり○国乃志摩も嶋の義也古事記に云々續日本後紀
に伊勢答志郡と見えたり伊勢とわかてりといふとて伊勢嶋なと云る歌ハしと
伊勢参河の中間に突出し海の為に淪没せられて後伊勢の東辺を
割て志摩国とせしといふにも崎形を観察するにもさもありぬへし畔案の内
なり伊雑の浦に数千尋の海底に高居乃あり地謂も謂とせるにも云々
○志波の湯ハ上野吾妻郡にあり夫木集に見ゆ
おとこゝにおもほえこそひハおもてまても志波の湯のゆへにしほゆかす
○伊賀小志中より赤く光る石の出る也是を嶋と名け田の畦にひと
す○縞布に志波といふ是ハしほ嶋のことく縞なりといふ志の縞なるへし
綅をよめり平縞といふ也初の今にみえゆ
志波ぶ　緊縮の意まろやかく○門戸をしほりといふ闘鍵のことく古
事記に紫垣やふたまりしまりもみかしとみゆ

志まひ　漢語の義なるへし周禮人舞の注に無所執以手袖為威儀
ゝとみえたり
志まぐい　嶋處とせりおのころ嶋を表し丈と姚ハ諸冊二柱神の体第と
本居ハ祓除の義をしるものにて嶋紀本ともかき見るといへり
△志み　日本紀に綵字をよみ万葉集に深字をよめりそむの義なるへし○
衣魚をいふハ一名蟫紛撥字鏡に此字を訓せりハ其音をもて訓とせるなるへし
宅家の義なり
いふつきおほ文も月日へてむしくはれハ志みのたちみうとそいふ
志まんのとみうといふハ源氏物語になるり韓文に豈殊蠹書虫生死
文字間にもみえたり
志みゝ　夜もしみゝ露もしみゝなとよめり繁き也といへり万葉集にあか
ねさしけりハしみゝにとよめり繁字をよめりしみゝにも同しといへり
一説にしみらにとよめり又しミらにあるへしいとくさいとはるく繁あるといふ
志みげ　倭名抄に清水をよめりすみ反し也神代紀に好井又妙美井と

よめり其之集り

いそのかみふる野の道の草まけてしげくみにハ又もかへる哉

○齋宮宣旨ハ經濟なる清水里とよめるハ延喜式に清水驛と見ゆ諏方郡之更級郡に清水ハ神社あり今さある村あり方言をしみづといへり

しみはく　源氏にしミゆ今此語に同じ深紫の義なり古今集にしみハつくともかくもよめり

△しむ　占をしむハ占地の標ト讀むハト居の標標をしめともしむとも云

○靈異記に朕しめ思召女也とみえてこれも占の義なるべし○染をよむハそむと通せり束髮の間に初をしめともよめりさるを万葉集にみえたり

○使令をしむとよむハしむ及ぼす也又狀國策注に以奉魏注に以猶使也とみえてより俾ハ使也と注し遣使人也と注し教使之為也と注せ為ハ國語注に使也とみえ致をよむハ後漢紀下に多くみゆ又着字をよむ使のごとし○れなれしむといふハ滲入のことなる義とめずる反せしく又入の音を縮索經にしむとよめるもありや

しんき　新規とあり新法といふがごとし○俗に懊惱乃さまをいふハ心氣此字なるべし西土乃俗語に蜩氣とみえたり蜩音陶也陳元贇が說にハ性急此唐音明の俗語なりともいへり○蜃氣の義もあり

しんじ　說文解字に天垂象見吉凶所以示字從二垂日月星也蓋觀乎天文以察時變示神事也所以禍福禨祥神祇之字皆從於示とみえたり

しんまく　俗に格勤者を身莫者などいへり天台文句に般特が偈に守口接意身莫犯の語に據也または慎莫ならん字魏志に見ゆ

しんがり　殿をよめり後将の義也軍退くにハ殿を功とし俗にしつちらひといふ後拂の義也或ハ破をよめり序破急の破なるべし

しんごり　延喜式に後取とあり俗に後取の字を當てしんごりといふ名目なり学も物語に解するしんごりをおひてきひめしありてと見えて名目抄に後取元三御藥陪膳役人定とみえたり供御膳御齒固に屠蘇白散なり又人式に侍臣堪大飲者奉仕をと見ゆ○大神宮の事にいふ奉幣の日になり後式に後執者一人以下人充之陪忌詞入立とよんでとあり

しんざう　新造の字ハ棠陰比事にみえたり○今亡妻の新婦を称せり
深窓なるべし源氏にも其かしづきさまをいへり ○娼婦をいふも唐詩に新
粧本絶世といへり

しんぢやう　尋常の音なるべし但中といふことゝいへり誘引に勝負せしことを
いふ是なり今けなげなることに解するハあしし人の容貌をいふも其いひつるれ
さるわり風流のさまにかへるハおろし姿を目だつもなくのれを
いへる詞なり

じんこじき　神今食とあり元正紀に始て見ゆ和記に古者謂木為介
故今云神今食者古謂之神今木さんされハしんぜとじんこんげと唤しまや
年中行事に六月十一日天皇幸中和院奉天照大神手船調斎膳以祭之と
みえたり十二月祭同日也神嘉殿に幸して夕へより暁まで御親らなし給ふ也
さるハ即月次幣を諸神へ奉りて公にてハ諸神を親祭り給ふしぬまて相嘗
祭といふ神今食と其新嘗に対へてつくる字なるべし日時祭或は相嘗祭
といふ即此なり

△しめ　日本紀倭名抄に標をよめりしめゆふしめさすしめし経営と見
えり○注連をしめといふも万葉集に標縄とあり又縄延とかきてしめはへ
てともよめり万葉集天智天皇大殯の時の歌に
かからんと豫てしりせハ大御船はてしとまりにしめ結ましを
といへるも既くしめの意なりといへり七五三をよむハ縄の法をもて家訓
せるなり○先にいふハ四目とかけり箙箭の数も中原高忠の聞書に注
地目ハ四つ分かつべき事本也但し三つにもすふべき也と略儀也といへり本をし
もとより出て竹根そもとるへし○文の上出又ハ商家にいふハト字をかけり標
の義也けさうゐにはさぶらふなりとも字を書也といへり○倭名抄に
鵲をよめり青小雀也と注せり三才圖會に鉄嘴といふ是也といへり
○しめゆふめといふハ緊緩の義也○俗に合閉すをもいへり

しめる　神代紀に喪をよめりめぐるにむしろ下をかけり源氏にも為の
断しめりて又風をしめりてといへり○湿をしめるといふも義同し陽氣
と交ぬをいふ滋ハ水の物を浸すさま○門戸をしめるといふ俗語も上にもいふ

が如し○船にて山をしめしといふハあるしを目當にとるをいふ標の義なるべし
○緊急の意にもいへり しめ木なといふ是なり○出羽乃方言にしく
事をしめるといへり
しめす　呈示をよめり似も音通を賈島詩に十年磨一劍今日把似(ス)君
又明人の書牘に見えたり標の義なり○湿潤の義にもいへり○古事記に
故能見志米岐其老(オキナ)所在故其地謂志米須也とみゆ
しめやか　日本紀に徐字又深沈をよめりしめりたる体をいふ也墻繞にしめく
とよめりしてといへるも同意なるべし
しめのうちびと　神事に預る人をいふ標縄の内なる人の義也又禁中を
いへり人を禁じて妄りに内に入しめざる意なり
△しも　下をよむハ神代口訣に下る也といへり地の体なるべし○霜ハしも
む義草木霜にあひて凋零するをもて名くるなるべし又しぼむの義粛殺の氣をもて
ていへり○助語にもいへり月にしもとあふも此類也古今集にけさハしもおき
けんかたもしらざりつといふ哥ハしもハてふハを霜に用ゐたり○上に字を下と

いふ語ハ孟子に上有好者下必有甚焉者矣とみえたり
しもと　倭名鈔に葼字をよめり唐韻に木の細枝也とみえたり茂木の義
なるべし新撰字鏡に楉をよめりいかゞ同書延喜式霊異記に楚字をよめり
楚ハ若木二合の字也若木の義にや又若弱に同し古今集にしもとゆふ葛
城山とよめるハ和杖をかづらにてゆへバかくつゞくるなりと顕昭の説也○倭名
鈔に笞をもしもとゝ訓せり拾遺集あり
しもさく　霜さく雪の山にハいでけとしもとさくらみゆる身ハ見えずけふ
しもつき　十一月をいふ霜月の義也霜の盛にふるを記なれハ名くる成べし
陸にハ九月を霜降とするハ霜初めをいふ也
しもふさ　下總也倭名抄伊勢物語にしもつふさとみえたりつハ助語也
しもつけ　下野をよめり下つ毛野の略也○地名にしもつけといふあり日光
しもつけ草もいふ虫の名よりなづくるなり紅白あり南京しもつけハ小也又
本草にしもつけや芭に淡ぐろあぢさゐとよめり拾遺集地名にもみえたり
繍線菊也といへり○山下つけあり是も小木也草下つ毛あり綉麻也と

いへり紗白なり

しものゝな　唐詩に霜皚とみえたり駕鴦瓦冷霜華重ともいふ

しもふりそ　織物の経緯にみえたり大津皇子の詩に山機霜杼織葉錦とみえて古今集にも

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる

しもすゞし　氏経日次記に文明十八年しもすゞし下姿にて對面侍者にもすゞしきぬてもとみゆ天正天文比の記録にみえたるハ帝の服にもいふといふ

しもびと　源氏にわらハしもづかへとみゆ雲圖抄に童女傳とあり文下仕ともあり五節にいふ事く裳から衣をきるとく

△しや　古事記にわしやこしやハ嘲笑者也といふ日本紀にハあなしやをこといふことに続く韻無きり人を罵にいふ平家物語にしや冠をうち落せ又しやつらをひとくとり踏まけり伊曽保物語にしやかしら今昔物語にしやつらハ猿に似て云ひさゝめるに笑ましり又しや足うち折てんといふあり又しや夜のくびあて川あまりなるとみえたり万葉集に己父己母をしやがちゝちゝとよめる事後撰顕昭の抄物にみえたり○倭名抄に紗をしやとよむハ音也

じや　口語にそれじやこれじやといふハであるの約まれる語なりであ反だなるを東人ハそれだこれだといへり一説に着の唐音ちやの転也とするハいかゞ○母じや人兄じや人ハ母である人兄である人也母なる人兄なる人なりともいへり○紗茶ハ女房の事をじやといふ

しやま　人情世態を熟したる人をしやまものといひ京にしやまと挿操にしやまこうべ天霊蓋をしやれかうべなりといふハされの義しや反さ也さまハさらせうこうらせ反さく

しやく　笏をいふ倭名鈔に音忽俗云尺とみえたり骨と同音なれバ忌て尺といひし也もとハ唐の制にいれたるものゆゑ倭訓なし尺といふハ唐の王玄策西域に使し維摩居士の室を量りて十笏を得たり故に方丈と号すといへり釈氏要覧にみえたり又笏尺と名付によるといふ事南海寄帰伝にみえて書言故事の注にも手板長一尺とみえたり手板も笏也晋宋以来の称なるよし紀原にみえたり○朝野群載にハ一尺二寸とみえて将家進

退の子細異になしたり○笏を把ハ右手に把て右の腰にさすゆゑ云ハ腰に挿也唐詩に蹺奉新書笏在腰談王正欲伴漁樵とみゆ○又ふくらの括りなくして近世或ハ極括を用ふ○礼服の時ハ牙笏を用ふ○扇を笏にかへてもつ事宇治拾遺にみえたり無位の人の神拝なとに扇を用ふるも様あり○爵を音にて唱ふ○墨幾挺といふことを俗に一ハ笏二笏といへり○本草に本謂之杓瓠謂之瓢とみゆひさごと訓せり○あやくといふ草ハ近江の伊吹山の小谷よりいづる蕣萊の根にして胡蘿蔔のごとし賤民根を食ふに三日過ても川につけおくといへり○越後の遊女をあやくと称す流をくむのなどといへり

ぢやう　此ハ錠ともかく書札に鏁といふハ居家必用に正字とみゆもと宜へ許なる文をいふに据なるべし○門戸及樞の類にぢやうといふハ筋なる葉に擴に鏁制といふをぢやうとよめり是と○僕にぢやうの名を記事といふハ悟なるべし

ぢやうえ　王制にハ貴賤となく書に烏帽子をかぶらす布衣とおもひこゝろとなて神官皆其の風の如く白き布を用ゐて浄衣といへる裁縫の制ハ

狩衣小用したる上天皇も用ゐし御社参に着御なりといへり○八幡宮放生會の神幸の時ハ供奉乃公卿ハ束帯殿ハ衣冠之還幸の時ハ鳥帽子浄衣にて供奉せらるゝなり

しやうげ　物に御生氣の方生氣の色なとみえたり今生家にいふ所を広義に生氣方正子二丑順輪十二月亥にいたり唐の法帖に往東都逐生氣ともみえたり陰陽寮譲十一月進勘文以天子來年御當卦載之生氣者八卦方位之名也○神事に衣服を生氣といひて五十日忌といふなり砂石集にみえたり○西宮記に御生氣御服もみえたり雲圖抄に陪膳尚藥著生氣唐衣とみゆ○瑋礙の音にもいへり

しやうじ　庄司ハ治安三年に院庄司とみゆ中世以来諸家及朝臣の田地にまで地を賜ハるを庄園といふ其家々より司人を置て主維せし也是を庄衙と庄園と別ちて令をかす頃より後ハ田畠に地頭を置て是と称く庄司の号もなく庄園も武家の威権に押へられ下司保司なと称せし也されど豊太閤の時まで熊野の八庄司なとありき

しやうや　農人の長をいふ庄屋と称するハ庄司荘官の遺名也といへり沿革略に村
長明律に管荘人なんといへり里正も同し
しやうぎ　界尺といふ規といへり或ハ縄木といへるハしやうぎといふへし○加賀の俗に
屋根板のまさ片に引ざるものをもいへり○鄙俗に挽といふハ板などなるへし
しやうもじ　唱門師といへり今朝家乃庄義長土用水合なんど勤る役之二水
記に洛外有唱門師村なんといへり抑に金皷(ゴジン)打着といへり
しやくたふ　明衡往来に石塔饗(スハ)事二月石塔之功徳恵業無量也となんて
といへり今庭院に遺まれり二月六日東福寺に於て高貴の皇子の法事を
いとなみし後冷泉河原に出て石をもて塔をつくり香花を供養しまつりて後叡
叡の皇子ハ光孝天皇の御子にて明を喪ひましましけれハ世の盲を愍み
田を寄てあつめさせたまへるといへりさればかの法名の皇子ハ此まさ塚洗を
延喜帝の皇子といふめしとぞ唯神名式粃荊国丹生郡に雨夜神社あり
○今せきたふといふ内典に多宝佛塔石塔沙塔泥塔等ありといへり○近江
国蒲生郡石塔寺の事ハ拾芥抄源平盛衰記等にみえたり

しやうだん　上段とかけり坐席の上段ハ一段高く設たる所をいふる縁高き所
乃こあまりの○世話に上段をいふとハいへるも是なり
しやうけい　上卿とかけり上ハ上日長上卿の上つんまつりごとあり公卿若干の
中に二人当日の事を掌る人をいふて節会の内辨に等しといへり
しやうじん　野菜海草の類を精進物といふハ古き語にて朝野群載御斎会
加供解文に精進物と出し青菀(カリ)鬼干和布(ワカメノ)鬼干海松(ミル)昆布などみえたり○
酷食といふも精進の事也○精進落ハ病ひに用ふ開斎也又開葷といふ杜詩に
多年病酒開硯滴(二)となる寛の字義に同し○精進の語ハもと魚肉を食せざるを
いへり今魚肉を食さる事とするハ佛氏の意なし
しやうゑん　荘園とかけり地を封せられ田を賜ふをもていふ湯沐の田外家に譲り
功田子孫に伝へ寺に施入せし類私領と名付官より給禄するに似らさる類の
を庄園とするしるし郡にいらす境界も定らさりしより諸国に領地庄と
なつけ名のみなりしといへり○正統記に中古となりて庄園多くなりて不輸の
處あまた出来しと有ハ訳米とハ見えたり

おやうらふ　職原追加に不謂是非二三位典侍号上﨟公卿ノ女号小上﨟諸
大夫良家醫陰陽道等女号中﨟諸侍加茂日吉ノ社司女号下﨟とみへたり
○大法会に高座をたかくかまへ田舎人のよざなりひとり上らふとぞかたる
いひし事也とみえたり
しやうぐんづか　塵添記に桓武天皇平安の都をうつして長久なるべきやうにとて
土にて八尺の人形を造り鉄の甲冑をきせ弓矢をもたせ東山の峯に一丈餘り
の穴をほりて西向に立てうづまれけりとなん今是泉涌寺の上方なる塚あり
或ハ知恩院に土御門院の陵を混称し或ハ上粟田口白川の將軍塚の
事とも將軍山ハ將軍塚堂なりともいへり一説に塚前を金剛幢大軍
と号す是を將軍塚といふ或ハ將軍塚閻羅王乃祢なり又泉涌寺の上方
なる家ハ園太暦に見えて花園院の陵の事ハ薩戒記に見えたり鳴動の事も
保元元年にありしハ大乱の兆也又治承元年にありて清盛入道福原遷都
の兆也明應二年の事ハ親長記に見えて享禄三年の事ハ後太平記あり
されて但に足利將軍の時也近くハ慶長二年八月にもありて太閤に豊

大閤薨せり西土の詩にも將軍塚鳴洛陽東とも將軍塚静家無難とも作
りて貫氏談録に華嶽金天王廟玄宗御製碑の自鳴て數里にきこゆる
ことありけり河州こんだの八幡の陵同じ聖德太子の廟大和多武峯の廟堂
津の國多田滿仲乃塚も鳴動せる事あり
△しゆん　朝家の公事に旬あり張説詩に旬宴美成功とみえたりしハ唐制
小治者也といへり内裡めでたく造られて初て南殿に出させおハしますを
新所の旬とや位につかせたまひて政にのぞみ給ふを萬機の旬とやと年中
行事秘抄に見えたり朔旦の冬至なれハ祥瑞とし旬を行ハるゝ也附の
花いぶかり夏の初冬の始に扇を賜ひ氷魚を賜ふとぞ物事に平時に
あり是を政に使ることを旬とて旬といふ字書にも徧也とも滿也ともみえたり○
△てゆう　韃靼に八日をしゆんといへり正保中越前舶漂流の話に滿列字式に舜とみゆ
しゆう　俗に石を引車を修羅といふ河修羅帝釈と權を争へるより梵
書にみえたり帝釈を大石とともして

しゆがく　筆法を入木といふは王羲之が故事也書断に筆入木三分とみえたり
しゆくし　宿紙とよめり海人藻芥に五人職事内裏に宿直し件紙を用ゐ
綸旨を書かすゆゑ宿紙といふと見えたり又古へ反故の紙を紙屋川に漬してすき
けり宿とふるきをいひて名くと又ふるきをもて綸に用ゐ墨をおとさずといへり一説に
延喜式にいふ熟紙をよみてしゆくしなりともいへりされど熟紙は唐書に見え
ゆ生紙に対しいへりたゞうち紙とぞ
しゆいん　物に手判を用ゐる事古くは朱墨ともにおしたるべし手印は今いふ手形の事
なるべし周禮の疏に見えたり○ごくいんも朱印にむかへて黒印といふと物に朱き
國印とも見えたり古へ每國印ありし山城國印大和國印のごとし又每郡にあり
近江國山田郡印大和國葛下郡印のごとし又朱の御手形吉野拾遺に見えし
たり○徐官が説に宋儒の簡札にまく墨を用ゐ元人は青を用ゆ皆喪制
なり朱を用ゐるに忌むさる故也といへり
しゆつせ　仕官して身にかゝるを出世といふは出身と同じ義と和漢共にいへど
此足は佛家の語なり語の如くなるべし佛家には出世間と云て世をさるを出離する

家に出家の大徳を称する語なり出京なる諸も同じといへり此ので
にをかく誤れるなり
しゆくばう　今大寺に参詣する人は其塔頭を宿坊といふ○神宮雑例
集に離宮院宿坊号斎殿雑事記に祭主之御坊なとみえたり
しゆりけん　手裡剣と書り撃斂の術也といへり南史蕭摩訶傳に見ゆ銑
鋧なりとぞ
しゆつくわい　述懐の字文選にみえたり懐徳の意は転化せずなるが家屋し
○懐舊は詩に懐古とも見ゆ文選に攄懐舊之蓄念といへり攄せり
述懐と少異なり
しゆかまじはる　流説華に衆に交るとみえたり又世諺の集に主たる家に交まじはり
赤らかなくいふも家に交まじりて万事妨げになるをいふ義なるべし又家
語に丹之所藏者赤ともみえたり
△
△しゆまや　雲圖抄裏書に初夜自亥二刻至子二刻後夜自子三刻至

于五四刻と見えたり又ごやが下にも見ゆ

しよし　所司の名は内裡式に見えて拾芥抄に行事勾當公文謂之所司と見ゆ京都所司代職は足利家の時より起る京の所司代都築氏貞和元年に見ゆ富樫持清後花園院の寶徳元年に侍所司に補せられし時に多賀高忠ち中原高忠をもて所司代とせしといふ今に所司代と呼ぶ本なり所司代源高忠は海東諸國紀にも出たり又周防州山口所司代ともみえて伊勢内外宮の所司代は小林邑にありて今奉行と称す○武人を諸士と称するは諸大夫より出

じよぶく　如木の字記録に多く見ゆ漢音によむといへり装束の衣をいふ字の如くこはく張る也今長烏帽子を着白丁を着て行列の先達を勤むる者を俗にしよぶくといふは如木なるべきよしいへり又いふそんともいふ板倉の義なりといへり

しよく急　觸穢とかけり濁ず義なりといへり梵書に浄觸とも成觸とも見えたり又東司具に觸杖觸桶など見え瑜伽論にいへる色聲香味觸法の觸も同じ

じよしやく　叙爵と書り元くは大臣に任ぜらるべき事なれども最末の者をもて名目とする通例なるが故に従五位下に叙せらるるをいふ○又宗爵といふは今昔物語に宗爵尋て買むと思ひてとも見ゆ民に爵を賜ひ或は賣買せる事漢の時事のごとくなるべし任官は任國なるをもて買むと欲するなり

△しらひ　仁賢紀に顧戀をしらひと讀み繼體紀に無字天武紀に有意の字をしらひともよみ源氏にいひしらひしらひつきしらひあへしらひ物拾遺集物名などにしらひともあらふに流儀葉に引あつかふ事のあつらひ又て知の義なるべし或は爭ともあり

しらく　しらくといふは物語は十訓抄にみえて紀の國のしらくの濱は紫式部日記にもあり伊勢のしらくの濱あり此外未来集にみえたり根合せにも合せらるる所も待あるは倭姫世記に白濱の名の塩姫の濱と書るも亦同なるべし

しらせ　神代紀に治字知字御字などよめり伊勢物語にしらすしるかりといふなりといへるも治字の意なり知をよむは令知の義也所知もしらしめすと又るしらす不同し唐書に知國事とかしこ見えたり○白洲の義　晴抱録に一雨洗沙去庭除如白洲と見えたり又白砂の義なり寄に葉もさきさてすれ庭を

にえたり○魚にいふは少戸祓に春魚とみえたり

しらげ　日本紀に精兵をしらげつはものとよめり粗をしらげたるといふは米より
出たる也新撰字鏡に䊪をしらぐともよめり舂米也と注せり○倭名抄に粺
米をしらげよね糳をましらげのよね糲をひらしらげのよねと訓せりまた
乃義ひらは並てあるをいふ也新撰字鏡に粺をしらぐとよみ糠をし
らげよねとよめり

しらべ　菅家万葉に調をよめりしらぶるともいへりあれ及べく此白の字放
悉し枕草紙にまづかれる事を家の敷をとりかかる事みやりけり
一人にもかかりしらべいふいとにくしとみえたり

しらは　衣を白羽と称せられし旧事紀にみえたり長白羽神并ありて白羽の
矢といふ也西土にも直に箭を指て白羽ともいへり

しらが　新撰字鏡に鬃をよめり白髪の略也○俗に辛苦する事を鬢の
白くなるといふは淮南子武王治に無一發之兵不覺頭髮為白とみえたり

しら鉄　白尾の家一条院の御宇御将の奉に鷹の古事をおもひ出て気

めしかりけるは源政頼が鷹の尾二ツきりて鶺鴒のきみしらずまで継たり鷹の尾の
上の白きをとりて古のあるなりしてまゐらせし古山のおもひ結たり後鷹を本
鷹の下とよ
紀明の鷹ならちの尾をまゐりしらふ尾つがきは継ふけ見ましや

しらぎ　新羅をいふしらは斯羅也きはくに及さるは國の義也といへり○新羅
東方別嶋に細羅国ありと三代實録にみえゆ○永承七年に始行新羅祭とみえゆ
新羅明神は叡山の楞嚴院にあり○本にいふは婆羅得也といへり白木の義實に
て此をとり移の器に塗たる天台の書にいふ三流をも同じ本たちの菓子ともい
へり○一種の木なりいふは橄欖也といへり

しらなみ　山賊を白浪といふは後漢の白波賊よりいへり又山立ともいへりよて
万葉集古今集にもよむ瀛津白波立田山と属たり拾遺集にはぬす人のたつた
の山とも見ゆさればなは白波とかけて盗人の事なるまでしらなみしるべし紀
用字の織人なりし事は履仲紀にみえたり是をかへてよめることといへり
浮草の一葉なりともいそがれおもひあらけそ奥津しら浪

しらたま　日本紀万葉集に真珠をよめり延喜式に白玉とみえて長暦官府に白玉
幾丸といへり管弦にまとれる玉といふ語なり○万葉集に水良玉ともかけりすゞ反志
つゞや反ら也金衛兵制に帽子を蒲西と譯し西瓜をすいくわとよめり○大
神宮式及儀式帳に髻結紫絲加美阿氏良白玉と注せり神代紀に髻(ミヽナ)
髪(ダキ)にまとへる珠の事をいへり注義經にも珠久在髻中不妄與人とみえたり○
梵書に赤真珠あり金色の者をいふとや雜珠に黒真珠あり又青色なるを称り
○催馬楽葛城に以れる葉井にしらたましづくやとありは光仁紀の童謡をとりて
爲なりさるは光仁紀今のなには白壁しづくや好壁しづくやとありて光仁の
御諱も白壁と称せられ謳ふて白壁なるべしといふ此諱も辟まてハありかなし
二八處會光陰の説也○神賀詞に白玉赤玉青玉をあげへるハ陰陽家式に
赤水精八枚白水精十六枚青石玉四十四枚とみゆ

しらぎく　菊ハ大要黄なるにて詩人の賞する所菊用に入ぶもまた同し
されど本朝に多くかくよみしハ新羅の菊の義なりといへり花史左編に菊品新羅一
名倭菊千葉純白とみえて群芳譜に標韻高雅非尋常比といへり一説にしら
秋ぞ出にし名を負ひたるをもて此ハ白菊を歌人も詠せり西土の人もしるゆゑに訓
ありよりて新羅の字を填たる也といへり○衣の義に以むれをもて白らるまへ
う也といへり○舊記に白菊神祠とみえたるハ今の御書宮式に此塚の紀伊
郡御諸(ミモロ)諸神社となり是也今相掌陽に八葉菊をもて家るといふ神体ハ神功
皇后也といひ傳ふ○妙音院相國熱田宮にて彈し給ひし琵琶を白菊と号
す今も居住になりしとぞ

しらはた　日本紀に素幡素旆白旗なとみえて降首の時に用ひる西土の
法も同じ○世に源氏の白旗をさして平家の赤旗といふハ源平盛衰記に平家ハ
赤きを捧げ八幡殿の家にハ白色を捧げ刑部殿の家ハ黒色を持くなど
みえ藤實公の記にも唐人の服の如く當家先祖より白綾無文の旗をも
ちゐ來りしとみえたり新編纂圖に八平家の祖貞純親王に大將軍の宣
旨ありて非常門混(ヒ)白の幡を賜はりし事記せりといへり二条院の御宇信頼義
朝が叛せし時官軍入大内一技白幟立赤幟の事なり是平重盛公の謀也○
白旗の城ハ彼家に在赤松が据し所也

しらかみ　巖下放言に士人郭暉寄妻誤封一白紙去細君得之乃寄一絶
云とみえたり俗諺にやるそ白紙文とよめとよめり
しらいと　風雅集に白糸を人の心にたとへたる事をよめる歌あり人
むかしの人のこころをしらいとにたとへたるなるへし
墨子に見練糸而泣之為其可以黄可以黒といへることなり○今名を出すは
雨しきりわたる雨の糸也○草にいふは白き也体をもて名くる也かは境にあり
もやり草ともいふ○しらんともいふ女中詞也
しらせ　日本紀に白瀬をよみ倭名抄に白瘢とよめり白膚の義
なりしらはたともいふ同し
しらがつく　万葉集に木綿をしらがつくといへり
又云に木綿をしらがといへり木綿は頭辞にいへり白髪着の義なるへしといふなり
旧の字をやかて来しらうけわたる裳のをそぎにて紛るゝ
と遺唐使に賜ふ御製に木綿をかくしてしらそて裳裾をもて齋ひをる事に
古へ神祭のいはぬ時のさまなりといへり

しらがさね　白襲也卯花より練貫の絹を君のしもとあり又まさすけに
白かさねすみのさんびしたかさねはよきころ也といへり藤垣草に冬の更衣にはそへる
ところ白く第のたる歌は露霜の色を用ゐられたり纔徴也
夏衣は衣なくしてやまかつの卯の木垣縄もしらがさねなり
しらにぎて　神代紀に白幣帛とまりたへゆふをいふと半せ也今は紙
をいふなる也
しらゆふばな　万葉集に白木綿花と見ゆ木綿の花勝也しらゆふか
織伴白ゆふか日は浪をたつるといへるは浪の花をいふなり
しらしまびめ　赤人の歌に見ゆ霞をいふといへり袁撰式には若詠霧時しら
たまひめとよみたり
しらぬりのすゞ　延喜式に白塗鈴とみえたり宝宮の飾の歌に
勅ありてみゆきはゆるしてらす鈴の響の音もしらぬりの鈴
万葉集の長歌に詠白大鷹に白塗の小鈴とみえたり○響の鈴は近世
岡の則船を名とせり

しらぬひのつくし　不知火也筑紫の万葉集に白縫筑紫とかけり景行天皇筑紫にくだり給ひし時に夜暗くて御船泊くべき浦しらざりしに忽火の光をみて岸につき給ひし事日本紀に見えたり是海火也今も空ねなりける夜は海上に火多くみゆといへり肥前肥後もとは火の国といひし国なりと倭名抄に肥前はひのみちのくち肥後はひのみちのしりとよめり豊後風土記古郡甲浦(カンノ)の奇火は別の事なるべし　古事記に筑紫国謂白日別ともみえたり

△しり　後又尻をもよめり下居(シモヲリ)の義なるべし　神代紀にかくれたり伊勢にてうべ備後にても相模にてもいへりといふ○源氏にしりへなかくろしといふは裾の事也建武年中行事に関白殿とかまへのしりたくみにせて殿上にまいりてといへるも同じ

しりさつくるは古記にみえ束帯のかくをさる事也

しりび　源氏にみゆ細流に後弱きありといへり　しりひ斧などいへり六百番歌合の判に後手といへり文章に龍頭蛇尾などいふが如し

しりぞく　退字をよめり日本紀に伏字まで逡巡をもよみ童蒙頌韻に擯を訓せり後にそぐく祝詞式に退字をそぞとよめり古語拾遺にしりへに

しりぞきにしりぞきてといへるもいへり

しりせば　知為者(タラ)の義也しりせばさぞあらましといふ也是わりあって反せし老せず絶せず死せずなどもいへりたらば此時はてを反せし知てのちの義になり　とよまんにはそのまなれば自らなるにも同じ

しりへで　日本紀に背字後手などをも訓り今しりでといへり被除此事呪詛の詞にいへり○儀式帳に短手(シノヒテ)二段拍畢時に後手一段拍罷向といふも見えたり神祇式に拍後手退出とみえたり斎王御拝にもいふ事あり大神宮年中行事にもみゆ

しりくらげ　尻打上の義也ちあ反たゝ日本紀に踞坐又踞字をしりくらとよめり

しりうごと　後言をよめり源氏にしりうごとといへり今のかげ言也

しりくめなは　日本紀に端出之縄をよめり倭名抄に注連をしりくべなはといへり字鏡氏家訓にみゆ藁の尻をこめたる縄也今のしめ縄即是也○左縄ともみえたり左縄は日道左旋を象るといへり西土にて左揺打縄をもて鬼子を縛るといふも此家の術になるといへり

しりへのみや　後宮の訓也天徳立后の宣命に斯理幣の政とみえたるも
後宮の政事なり
△しる　知識ホの字をよめり唐山の俗語に知道といふハ道字に義なし○
万葉集に領字をよめり伊勢物語にしるよしゝてといへる是也今も所知といふ意
かも何の列を知といふハつかさとる意なり○汁をよめり日本寄語に
羹云水路といへり広州に豆腐羹といふハ豆腐汁辛辣羹といふハ辛みけ
也羹湯はなくてす何の液汁をもいへるにて○祝詞式に汁にも穎にもといへる
ともしるとも和稲荒稲といへる同しきにて汁ハ酒を称する成へし○濃に対して
うすしといふハ稀のしる成ことにハ湿の義也○倭名抄に醨をよめり酒薄
ならし浪なり
しるす　注記書録等をよめり知の義よりいへる○識ハ誌に同し
しるし　神代紀に璽をよめり又効験契印證ホをよめりしるすと通せり又
蔓方に験をしるしともよめり○朝野群載国務の條に國印倉印文印みな
璫嚢抄に亀をしるしと読しるか亀卜の事なり○著明をいふハ白しの義也

○日本紀に氣字兆字候字圖字をよめり表も同し又何益をなにのしるしかあ
らんとよめり○標もよめり坐をへき所のしるしにハ版を書て立へき所のしるしにハ
標を立るなり續日本紀に限伊勢大神宮之畔樹標ともみゆ○論語に徴をよ
めり○記號をもいへり○清輔抄に人つく牛ハ角をきり人かむ馬ハ耳をきりて
しるしとす律のいましめなりとみゆ
しるべ　日本紀に導者をよめり昔まく万葉集にハ指南をよめり識方の義
なるへし○日本紀に為師をしるべすとよめるも意通へり
しるやし　日本紀に旗字相字なとをよめり験欲の義にや新古今集に
旅人のいのちをしらましせハ難波のあしに契らさらまし
しるまゝにしるまくしとかへり
しるしのすぎ　源氏の奇にもよめり印杉といへり童蒙抄に伊勢大和あるハなど
郡の事をいせくいつくし万葉集に
みわやまのしるしのすきとかすみたしるしの杉のみえかくれして
詞林採葉に祝大物主神以杉木為主とみゆ今も社前に一株の老杉あり

てば名なまへりしとぞ○大貳有國が任はてゝ京にのぼるとて香椎の社にて

ふりせぬハしるしの杉につけてこそきたりしハ梅の花のみやこへ

らいあや杉といへるなるべし

しるしのやま　標山とかけり大嘗宮の前にあり其國司列立すべき所のしるし

の事に山を造りさまゞゝの飾り物をかざりて引立る事續日本後紀に委く見ゆ

○淳和帝の大嘗祭に凡玩好金銀刻鏤等飾一切不用標以賢木造之用橘

并木綿類書悠紀主基字著樹杪以清素供神事耳と類聚國史にみえたり

しるしのはこ　紫式部日記にみえたり神璽の御箱をいふなるべし

△しれ　俗に物語にぬらたくしれものと云榮花物語にしれゞゝしくなしきさま

とみえたり○たのもしき代人にしれものとあるハしれゞゝしくのおもし

しれもの　源氏にしれものゝ物語せんとみえて拾芥抄にもおそらく見ゆ

みえたり本朝文粹東鑑に白物とかけり万葉集に愚人をしれたる人と

よめり夜鶴庭訓に無慧ハ所謂白癡とみゆ

△しろ　代をよむハ神代紀にみえたり和事の和のごとし皇代紀に寓をよめり

○苗に苗代といひ日本紀に草代を訓せり本に齋代などいふハ直に其物を指たる辭

なりまた商家に代物の辭あり○頃を日本紀にしろとよめり畝百為頃とい

へるにハ合ひかたし左右國に五十餘萬頃海に没せし事日本紀に見えてたゞ縮ぶ

る所なせり　千町といへり千町即一萬石の地をいふ吾八郡にある所の是代の義

なるべし倭名抄に頃今之法六町六段二百四十歩とみえたり俗に代といふ

にハ是の義なりや拾芥抄に七十二歩為十代五十代為一段と見えて三代稲に

令前租法熟田五十代二百五十歩為五十代とみえたりまた十代田五百

代小田などいへり又東代西代といひ田を平かにするをしろかきといふなりしろを

かく稱るもしろをかへるといふ詞も同じ後世幾代と音によむも是なり○今俗價

をしろといふも代の義也○城をよむハ白壁より名づくる成へし又城郭の意とも小

城ハ堡障也○樋代舟代土代壁代などいへり実の義也○城を姓にハ音に呼り

しろし　白をいふしるしの義明らかなる色をいふなり○攝政賴通公曰若定賴

才能賢則賢然緩怠亦甚我聞博雅才人之筆管絃无所不通而天下緩怠

白者也定賴豈甚耶白者猶言知名者見小右記○傳燈録の注に印度以

一年為一白とみゆ
しろむ　倭名抄に擣押をよめり油の事にいへり今はしろむといふなり〇彩摺
字鏡に犕をよめり牛乳也と注せり
しろめ　白鑞をいふ職人寄合にしろみの鏡見えたり白銅鏡なるべし〇遊
女白女ハ丹波ちたにや浦の女なり古今集に見えたり大和物語にハ源昔ろ
女にいふ遊女と出づ遊女記に江口則観音為祖中君小馬白女主殿蟹嶋則
宮城為宗如意香爐孔雀三牧神崎則阿孤姫為長者孤蘇宮子力命小児
之属とみえたり
しろもの　貨物を代物といふハ日本紀に草代之物兵代之物延喜式に倉代
物なとみえたり〇禁裡詞に塩をしろものといふ海人藻芥にみえたり
しろかね〇　銀をいふ白金の義也天武天皇の時より始て我邦に出たり延喜式
にも太宰府より毎年銀八百九十両を貢すとみえたり後佐渡伊豆よりも出とり
〇五雑組に唐太宗賜房玄齢黄銀帯則黄銀非金明矣漢武帝紀收銀錫
造白金則白金非銀亦明矣と見えたり〇ちやが銀書さ一様ずなかり圓形

鑄れるもの多く面に矮雞を鑄つけたり京室町の吉林菴にもと數百粒
ありし今十餘粒残れり寺ハ加藤清正の菩提所なりといへり朝鮮銀なる
小や〇しろかね〇ハ鈹銀之〇銀嵩ハ吉野になり征東将軍興良の及せしむく
しろたへ　常に白妙とかけりて文字に泥て白く妙なりと説ハ謬れり白とハ
深ぬをいふ妙ハ假借の字なると絹布の名にして万葉集に白細布と訓せり
白栲の袖白木綿の吾衣袖ともありて又白妙の衣とつけるも栲葛の布
をいふなり又白妙の麻衣をそとよめるハ喪服をいふ也〇古語拾遺に植穀造
白和幣と見えたりされハしろたへハ穀の皮をもて造れる布にして白栲をよめり
白ふぞてハ木綿也ともいへハ白木綿ともある也〇白妙の雲庭白妙に白ふ帛ふ
なと万葉集よりして其白なるをも稱してもいへり
しろぎぬ　日本紀に緇を訓せり白衣の義續紀の宣命に出家人も白衣
もともに僧緇を緇素といふ義也梵に白衣居士華嚴音義に西域俗
人皆着白色衣也ともみえたり〇日本紀に絁をしろきぬと訓せり素之
軽者と注せり〇神家の人常に白衣をきるハ浄衣の義也〇今人喪服

り白きを用るハ清朝の人の色縞をまるも同し漢古より礼に素服
といふこれなり

しろうるり　徒然草にみゆ白瓜の説よろしかるへし又りくさんとみえぬ
なやの盛親僧都さへさる法師を見もしらずといひしとハおぼつかなき事なれ
ぬ事をしるしたる事なしといへる或ハ渾沌にあたれり

しろしめす　神代紀に知字文徳有の字祝詞式に知行の字所知食
の字などをよめりしろしめしと見ゆ知看といふも是也万葉集
りしろしめすともみゆ

△しわ　倭名抄万葉集に皺をよめり肉輪の義なるへし文選に波をよ
めるも同し古今集に波のしわとよめり新撰字鏡に皺に作りしわめくと
よめりしわくちも同し

しわざ　日本紀に習俗を訓せり作業の義なるへし又事字をよめり又云
為為行行業所為所行行能をよめり伊勢物語にしわざといふも同し

しわし　鄙吝をいふ皺よりいへるにやしわくこいふもしわつけなりとも
いふなり

△しぬき　栄花物語に御服をぬきてしぬきまつりしぬきたまへる
の物せられなり

△しふや　万葉集にみゆるしふやしは略語也といへり

△しお

荘原氏